

# 崩壊世界と異世界姫様

ゴールド龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

謎の感染症により崩壊した世界。ユーラシアやアフリカ、北、南アメリカは感染者の地獄と化し、唯一生き残っている日本や台湾、イギリスとオーストラリアでは食料不足等の様々な問題を抱え、人類は未曾有の危機に陥っていた。

それでも人々は生き残り、未だ存在し続けている。未来に希望を託すために。

この物語はアメリカの1人の回収者と異世界から来た2人の少女達による命を懸けた戦いと愛と勇気の物語である。

※作者はこれが初の投稿です。色々文章力や知識が足りてない所もあると思いま

すが、どうか楽しんでいただけると幸いです！

※ここはこうした方がいい！等思った方は良ければ感想で言っただけで貰えるとありがたいです。出来る限り力の尽くして良い作品に出来るよう頑張ります！

※あまり小説を書いたことの無いので投稿感覚が空いてしまうかもしれないです。

※新しくもう1つ小説を描き始めました。その為、投稿頻度が空いたりしますが、そのところ、ご了承ください。

※後、下手な絵ですが登場人物の挿絵描きました。小説を見る時のイメージにどうぞ。

主人公 アキト・ラングレー

ヒロイン フェリエラ・フォン・アークライド

ヒロイン リュミエス・カーグライト

# 目次

10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	プロローグ	本作品設定
77	69	62	56	49	41	34	28	20	13	10	1

16話	15話	14話	13話	12話	11話
124	116	108	101	92	86

# 本作品設定

## 登場人物

主人公 アキト・ラングレー

本作の主人公。歳は19で、14の時家族が感染者によって殺害され、1人生き残った所元軍人の義父となる人に拾われる。(ちなみに義父は元米軍特殊部隊デルタフォースの教官を勤めていた設定)その後、義父に戦う術を叩き込まれ、回収者の道へ進む。スカベンジャー

性格は幼い頃からよく虐めにあっており、人を疑う癖がある為ひねくれており、素直に感情を表せない。しかし、根っこは基本的にはお人好しな為、悪態をつきながらもなんだかんだ付き合ってくれる不器用な性格でもある。

身長は190cm程で、体重は86キロの恵まれた身体を持っている。髪の色は焦げ茶色が混ざったブロンドヘア、髪型のイメーヅはHELLOINGの大尉で、同じ様な帽子を被っている。顔は目付きは鋭いが、死んだ目をしている。

戦闘能力は、元米軍特殊部隊デルタフォースの教官に抜かれたことがある為、銃の扱いはベテラン並の実力を持っている。例を挙げるとすれば、他人から借りた狙撃銃スナイパーライフルを、自分が使いやすいように調整を施さなくても、その銃の特性を一瞬で理解することが出来、1km先

の目標を撃ち抜くことができる。

フェリエラ・フォン・アークライド

一応本作でのヒロイン予定。歳は16。異世界にあるアークライド王国で、王の娘として生まれる。そこから何不自由なく伸び伸びと成長し、16になり成人を迎えたため、父親の手伝いをする為3種族合同のサルハラ大陸調査の代表に立候補。そこへ向かう途中に転移魔法に巻き込まれ、現代の世界へ転移する。

性格は気弱ではあるが、基本的に誰にでも優しく、やると決めた事は絶対に諦めない芯が通った性格。王国の姫でもあるが、一般人の常識にも意外と詳しい。

キャラクターの外見のイメージは、ポニーテールにして、赤髪に変わったFateのネロを元にしました。

リュミエス・カークライド

本作のもう一人目のヒロイン予定。歳は17で、アークライド王国で王家に長年仕える名門騎士の一族であるカークライド家へ長女として生まれる。5歳の頃に母親を亡

くし、父親からカーライド家を継がせるために軍事教練等を幼い頃から叩き込まれる。15になった年に、アークライド王家の1人娘であるフェリエラに護衛騎士として仕え始めた。その2年後、3種族合同のサルハラ大陸の調査へ護衛として参加する途中、フェリエラと共に現代へ転移することとなった。

性格はThe 堅物と言える性格で。非常に頑固で、先入観から相手を決めつけてしまう事もあり、勘違いを良くしてしまう。姫であるフェリエラを敬愛しており、時たまフェリエラによるイタズラをされたり、いじられたりするが本人はそれに幸せを感じる。後、考えてる事がよく顔に出やすいためカードゲームに滅法弱い。

騎士としての実力は、国内でも有数の剣の腕前を持っており、150cm程の長さで、重量もあり扱いが難しい大剣クレイモアを軽々振り回す腕力を実力を持っている。関係ないが、実は愛犬家でありよく実家では愛犬相手に癒されている。

キャラクターの外見のイメージはISの織斑千冬をショートボブにしたイメージです。

### 世界設定（現代）

・感染者

突如として発生した感染症の患者の成れの果て。所謂ゾンビ。イメージ的にはワルドウオーズのゾンビの性能を少し落とした感じだと、バイオハザードのゾンビの外見のイメージです。

・変異体  
ミュータント

感染者の中で、ウイルスが突然変異を起こす事があり、突然変異により、体型や身体能力、体の構造等が変化する感染者がいる。主に体の一部が肥大化する $\alpha$ 型と体全体が肥大化し、より耐久や、身体能力が強大化した $\beta$ 型等確認されている。イメージ的には *left dead* の特殊能力を持った感染者や、バイオハザードの B・O・W みたいな感じ。

・回収者  
スカベンジャー

参考にしたのは、ゲームで言うなら *DAYZ* や *7 days to die* のプレイヤーみたいなき感じ。手に入れてくる主な物資は電子機器やそのパーツ。または使用可能な日用品や衣類、保存食等。

・回収者連合  
スカベンジャーギルド

参考にしたのは、モンハンの集会場みたいなもの。依頼があれば、ここに手に入れて欲しい物資を依頼して、依頼者が報酬を支払うシステムがある。(なお、前払いは無い。理由は、回収者が死亡した場合前払い分を無駄にしないため) 他には、自分で物資を届け

て物々交換で欲しいものを得るシステムもある。ギルドに入る利点は、探索に行く際に必要な人員を集めやすい。ギルドに入れば物資交換の時に交換される物が少し増える。デメリットはギルドから回収者本人に依頼が来れば断れない。ギルドから緊急要請が掛かると強制参加しないとイケない等。

・アメリカの情勢

感染元がニューヨークな為、周辺のノースカロライナ州やペンシルベニア州等はほぼ全滅状態になっていて、東海岸はアリゾナ州や、カルフォルニア州、ネバダ州等がまだ生存者が多い地域になっている。しかし、大都市以外の小さな街や、いくつかの地域は全滅している所がある。主な生き残っている主要都市は、本作品の本拠地のシアトルを除くと、ラスベガス、ロサンゼルス等

なお、アメリカ軍は東海岸を中心に感染者殲滅作戦が行われており、結果としては、大多数の感染者の排除に成功したが、その代わりに多大な物資の消耗、多くの死亡者を出してしまい軍としての力はかなり減少した。生き残った部隊の中から物資回収部隊が設立されており、それが始まりとして、スカベンジャーギルド回収者連合が設立されている。スカベンジャー回収者連合では、ギルドに入会した回収者が探索を行う際に、元軍人が護衛について貰えるようになってる。

・ユーラシア、アフリカの情勢

こちらもドイツのベルリンから中心に拡大していき、他国の政府が予想していた数よりも感染者が増え続け、それらを抑えきれず、ロシア等の北欧諸国や中国等のアジア方面に一気に感染が広まってしまった。(特にドイツに恨みとかはありません。ただ何となく選んだだけです！ その所、ご了承ください！) 主に生存している箇所は沿岸部に集中している。(これらの理由としては、軍などの集積地域に元からなっている箇所があつた為である) しかし、アフリカ等の地域では、部族による抵抗や武装組織等の攻撃により、食い止められている所もある(ソマリア等の紛争地域にはそういった民兵等数多く存在しており、抵抗出来たという設定。部族の方は何故かつて？ マサイ族とかつて、くそ強そうじゃん？ (偏見))

#### ・ 島国の情勢

日本や台湾、イギリス、オーストラリア等の島国は感染者の侵入方法が飛行機や船の乗組員に紛れ込んで来る方法しか今の所無いため感染者は確認されていない(今のコロナとかもそうだけど、検疫とか入国審査等を厳しくするはずだから、感染者はいないという設定。だけでもし感染者とか出たら何処にも逃げ場なんてないよね島国って)が、アメリカや中国等の食料の輸出、サウジアラビア等の石油やレアアース等の輸出が停止したため、慢性的な物資不足に陥っている。(特に日本がやばい事になっています。そりゃこんな設定だったら輸出に食料等を80%から90%位依存しているからね。仕

方ないね♂)それにより、食料不足による餓死者等多発する問題などが浮かび上がっている。だが現在は海中資源の回収や、オーストラリアからの食料輸入が始まってからは少しは餓死者のペースなどは収まっている。

世界設定 異世界の場合

・人族

基本的には現代の人間と代わりはありません。技術的な進歩は、17世紀くらい海外と同じくらいの技術力。まだ銃等の科学は発達しておらず、逆に魔術の研究がかなり進んでいる。人族のメリットは、基本的には平凡だがどの分野でもこなせる所謂器用貧乏の特性を持っている。イメージ的にはこのすばの世界の職業で、冒険者の職に生まれた時からなっているイメージです。

・亜人族

所謂エルフやドワーフ等のいかにもな異世界って感じがする種族。亜人の特徴は、本的には人族より寿命が長く、身体能力等の基本スペックが上で、種族事に特性が違いを持っている。例で挙げるとエルフだったら精霊魔術が得意。ドワーフだったら家事技術。他にも人狼とか猫人とか動物の特性も持っている種族もいる。

・魔人族

いかにも悪役臭がするけど、この世界では友好的な種族になっている。(昔は人族や

亜人族を敵視していて、魔王によって戦争が起きていたが、勇者により魔王が倒されてからは時間をかける必要があったが、和解する事が出来たという設定です）魔族の特性は基本的には魔力が人族の10倍程所有していて、基本的には魔術のスペシャリストである。後は亜人族と同じ様に種族事に得意魔術が変わってくる。例に挙げると、一般的な魔族は攻撃魔術、スケルトンは死霊魔術、サキュバスは誘惑魔術等色々な種族がいる。後もう1つの特性として、魔族は魔力を使用することにより、周辺に使役された魔物を召喚できる。

#### ・ハーフ

本作品に出すか分からないけど、一応記載。ハーフは基本時には親の種族が持っている特性を1/2程度の効果を引き継ぐ。例、親が人族と亜人族のエルフの場合は基本的にはある程度の事がこなせて、弱い精霊のみだが、使役出来る。など。

#### ・異世界の世界情勢

こちらの世界は過去に異世界からの転生によりやって来た勇者によって平和になった世界という設定です。その為、平和になった代償に兵士や魔族などが弱体化していません。一部実力がある者がいる程度で収まっている感じ。その為、兵士は基本的に練度不足。この世界は3つの大陸で構成されていて、1つ目の大陸はオルスラ大陸と言い、基本的に人族と亜人族が住んでいる。この大陸は1番広い大陸であり、その中で、1番大き

い国はアークライド王国である。もう1つの大陸はガリアル大陸と言い、大陸の中で面積が1番小さい。戦争起こしたのも人族と亜人族を殲滅し、オルスラ大陸を手に入れる為でもあった。基本的には住んでいるので1番多いのが魔人族で、大陸の中央には今はシンボルとして残されていて、観光名所にもなっている魔王城がある。最後の大陸はサルハラ大陸といい、戦争があった為か未だ開拓されていない大陸。昔の日本で言うなら蝦夷地的な存在（蝦夷地は今で言う北海道）。未だ未踏の地であるため、謎が多く残されている。その為近頃3種族合同の調査が計画されている。

## プロローグ

20XX年4月21日・それは世界の破滅が始まった日。

突如として現れた謎の感染症により世界中は混乱に陥った。

感染が始まったとされている場所は2箇所あり、1つはアメリカ合衆国の中心とも言えるニューヨーク。もう1つはドイツ連邦共和国首都のベルリンだ。

この感染症は瞬く間に拡大、ユーラシア大陸、アフリカ大陸、北、南アメリカ大陸の殆どがたった3ヶ月で感染者が蔓延る地獄へと変わっていった。

しかし、島国である日本、台湾、イギリス、オーストラリアは感染者は確認されていなかったのだ。何故感染者が見られなかったかと言うとそれぞれの国は感染が確認されてからの対処が非常に早く、検疫や入国制限が厳しく行われた為である。更に言うと感染者は海を泳ぐなどで渡ってくることも無く、感染症が広まる方法が感染者が生存者に対しウイルスが多く含まれていたりしている血液等の体液を直接身体へ侵入させる・簡単に言えば感染者に噛みつかれたりしてしまう事が無ければ感染することが無かったからだ。

だが世界中の殆どがこの様な事態になってしまった為とある問題が発生する。その問題と言えば食料や燃料などの輸入がストップしてしまっているということである。

それにより日本などの輸入に食料などを依存している国は忽ち食料不足等が発生した。

これにより、餓死者や感染により等が多発し人類の総人口は1年のうちに凡そ80%が死亡した。しかしこの1年間に感染症の研究が進むにつれて感染者に対して分かった事が多く発見された。

1つ目は彼ら感染者は聴覚が以上に発達しているという事、2つ目は感染者は所謂ゾンビ状態になっており知性を失う代わりに身体能力が向上しているという事。3つ目は感染者の中には突然変異が起こることがあり、それにより体の肥大化、体の一部分の異様な発達、更なる身体能力の向上等が確認されている。

更に感染症の研究により感染症に対するワクチンの開発に成功。しかしこのワクチンの効果は感染を防ぐものであり、既に感染している者に対しては効果が無く、元の人間へと帰ることは無い。

このワクチンの開発の成功により感染者が発生することが減り、ある程度の平穏を人類は取り戻すことが出来た。が、それは島国の中でしかない。それ以外の場所・ユーラシア大陸や北、南アメリカ大陸等では未だに感染者は増えている。

しかしその中では生き残った人類による生存者の町や都市が存在する。例を上げるとなればアメリカで言うところのニューヨークやワシントンDC等の感染地帯に近い都市はほぼ壊滅状態であるが、西海岸ではシアトルやラスベガス等の都市はまだ存在してい

る。東海岸から移動してきたアメリカ陸軍が総力を掛けた防衛が行われ、多大なる被害を被ったが、それらの都市の防衛に成功した。

そして生き残った人々の中に新しい職業が起き始めていた。その名は回収者スカベンジャーというものである。目的としては感染者により壊滅した都市や街からまだ使うことの出来る物資や食料、武器弾薬の回収を主な目的としている。更には都市などでスカベンジャーギルド等が設立され、組織的な活動も行われている。

この物語は崩壊してから凡そ5年後の世界で、1人の回収者と異世界から偶然この崩壊した世界へと降り立った1人の姫様ともう1人の騎士による命を懸けた愛と勇気の冒険譚である。

## 1話

「  
」

息を潜め、俺は手に持っているAR-15を構え、慎重に照準を定める。照準の先は体をくねらせながらさまよっている感染者。不規則に動く為狙いが難しいが、そこは今までに培ってきた感覚をフルに活用させて引鉄を引く。

パシユっと言う音と共に弾丸が撃ち出される。弾丸はあつという間に感染者との距離を詰めバカッと感染者の側頭部に赤い花卉を散らせた。

「  
」

そう俺はボソリと呟く。これで何体目だろうか。もう何体撃ち殺したのかは100を超えた所で数えるのは止めたが、ふとそう思いながら俺は移動する。

フリーの回収者《スカベンジャー》となつてから凡そ2年くらい、親が14の時に感染者によって殺されてからは5年と言つた所だろうか。最初の頃はただ奴らに震えながら生きるしかなかったが、偶然だが俺を拾ってくれた義理の親になつてくれた軍人の義父から銃の扱い方を習つてからはこの様に回収者として活動するようになった。

最初の頃は死体を見る度に吐き気や恐怖を覚えたもんだが、今となつては何も感じる

ことが無くなった。感覚が狂ってきているというのも有るだろうが、そうしなけりやとつくに何処かで死んでるか、精神がイカレちまってただろう。まあ、今の状態も十分イカレちまっている自覚もあるが。

「取り敢えず、奴らに見つかる前にさっさとこの地区の物資、見つけるとするか」

そう言い俺は既に奴らの手に墜ちた地区へと進んで行った。それから多分、2時間半位経ったところだろうか、物資も大体集まり、持ってきたバツパツクに詰めていた時だった。

「は！もう」

「です。まうー！」

いきなり外から声が聞こえてきた。声の感じからして女だろうか……どうやら片方が錯乱していてもう片方が宥めているような感じの声だった。

「何が起きてんだ？」

正直に思ったのが「面倒臭い」だった。回収者の中では生存者を見つけた場合、必ずセーフゾーンまで誘導しなければいけないと言う暗黙のルールがあった。俺としては、素人が増えるって事はそれだけ死ぬ可能性が増えると経験上そう考えている。というか、実際に何度も死にかけて。

だが、人口が減ってきている現在では生存者は、貴重な労働力でもあり、いざと言う

時の戦力にもなる。そういう事を考えるとなまじ見捨てようにも後々になって「あいつは生存者を見捨てた奴だ」と知られてしまうと回収者としての活動がし難くなるだろう。スカベンジャーギルドには入っていないなくても、手に入れた物資を精算するにはギルドの力が必要になる為、悪評は避けなければいけないからだ。

「はあ・仕方ねえ、行くか。」

足取りは重い、そう言いながら俺は声が出た方向へ向かっていった。

数時間前 オルスラ大陸 アークライド王国王宮

「では、行つてきます。お父様！」

「うむ、道中気をつけるのだぞ」

「ええー！ 必ずこの国に良い報告を持ち帰つてきます！」

そう言い、私・フェリエラ・フォン・アークライドは私の護衛に着いてくださる騎士ことリュミエス・カークライトと共に王宮前に止めてある馬車へ乗り込みました。

目的は未だ未開の大陸となつているサルハラ大陸への調査となつています。かつては戦争状態となつていたがリアル大陸の魔人族達と、今でも同盟を結び、良い関係を築けているアークライド王国のお隣さんのアルテオ王国の亜人族の方たちと共に。

何しろ「3つの種族が共に手を取り合い、謎に包まれていらつしやるサルハラ大陸への調査をする事がとても大事なのだ」と、お父様が仰つてたけれど、本当に、大丈夫か

しら。

昔、人族、亜人族と戦争をしていた魔人族を信じられないという訳ではありません。私が不安に思っているのは、無事に調査を終えられるかという事。何故かと言いますと、昔に比べほぼ平和な世になっている為か兵士や、騎士達の実力が落ちているからなのです。それも又、亜人族の戦士の方々と、魔人族の方々も同じで、昔に比べてしまうとしても力の差があります。

何しろこれから調査に行くのはあのサルハラ大陸。現地に生息している生き物は、実にはかなりの進化を遂げていて、私達では太刀打ち出来ない程凶暴だしたら、もしかしたら全滅も有り得ます。

すると、その考えていた事が顔に出ていたのか隣で座っていた護衛の騎士のリユミエスが話し掛けてきました。その可愛らしい顔は、少し不安そうな感じの表情をしていました。

「姫様、どうなされましたか？ どこか具合がよろしく無いのでしょうか？」

「ふえい！ あつ、いえ、少々、考え事をしていただけですよ」

考え事をしていて意識が向いていない状態だったからですが、咄嗟に返事をした為、少し変な返しになってしまいました。うう、ちよつと恥ずかしいなあ。

「そうですか、何かご不安な事がありませんか？」

「えつとですね、サルハラ大陸への調査の事を考えていました」

「サルハラ大陸の事ですか。どんなことを考えていらしたか、教えていただいてもよろしいでしょうか？」

「そう言われ、少し考えましたが、私は言うことにしました。」

「もし、もしもなんだけれど、サルハラ大陸に生息している生物がとても凶暴で、太刀打ち出来なかつたらどうすればいいのか」と考えていました。いけませんね、まだ着いてもいないのにこんなことを考えてしまつて。」

「そう言うトリュミエスは「そういう事でしたか。少し、失礼致します」と言い、私の手を包むようにトリュミエスが手を添えました。」

「リュミエス。」

「正直に言いますと、私もその様な事を考えていました。もし、その様な状況になつたらどうすべきかと。」

「貴方もそう考えていたのですね」

「はい、姫様の護衛を務めさせていただいてるので。先輩方からも『常に最悪な事が起こるかもしれない。ならば、その時にどれだけ最善を尽くせるかが大事だ』と、言われました」

「リュミエス。」

「大丈夫です姫様、いざという時は私を存分にお使いください！ 私は、その時の為の騎士ですから！」

そう言い、リュミエスはとても綺麗な笑みを浮かべました。そうよね、いざという時にどれだけ最前を尽くせるか、ですか、確かに大事な事ですよ。

「ふふつ、とても頼りになります」

「そうですか、良かったです！」

ええ、でも。と私は言葉を区切り、こう伝えます。

「私も、いざという時最前を尽くせるか頑張りますから、絶対に無為に命を投げ出す事はないで下さい」

「はい、分かりました！」

「ええ、頼みますね」

そう言った時でした。いきなり馬車が大きく揺れ出したのです！

「つ!?!? 一体、どうしたのですか!?!」

「くっ、御者、一体何があった!?!」

リュミエスが叫びます。ですが、帰ってきたのはより激しい揺れと無言でした。

一体、何故なの!?!

「くうっ、また、揺れが激しく」

「姫様ア！」

揺れが最高潮まで達した時でしようか。いきなり馬車が横に倒れそうになり、私は何もする事が出来ず、リュミエスが咄嗟に庇おうと、私に覆いかぶさった所で強い衝撃を受け、私は意識を手放しました。

・ ・ ・

## 2話

「ひ？姫様ア！」

「う、ん」

「一体どの位の時間が立ったのでしょようか。朦朧とした意識の中、私は目を覚ました。ゆつくりだけど周囲を見渡す。どうやら、まだ馬車の中みたい。元の状態と違う所があるとしたら横倒しになって位だろう。リュミエスの方へ顔を向けると、少し涙ぐみながら私を見ていた。

「姫様！ ご無事ですか!?!」

「え、ええ、少しだけ、頭がフラフラするけれど大丈夫よ」

するとリュミエスはとても安堵した表情を見せる。心配、掛けちゃって申し訳ないなあ。

「一体どうなったの？」

「いえ、私も正直どうなっているかはまだ分かりません。姫様が目を覚ますまで、ここを離れる訳には行けませんから」

「そう、心配、させてしまったよね、ごめん」

私がそう言うと、リュミエスはすごい勢いで顔を横に振った。

「いえいえ、姫様をお守りするのが私の役割ですから！　．．．どうです、動けそうですか？」

「ええ、少し良くなってきたから．．．っ」と

そう言いながら私は立とうとする．．．が、まだ完全には治ってないみたいで少し目眩に襲われる。すると慌てながらもリュミエスは私を支える。

「大丈夫ですか、姫様？」

「まだ完全じゃないみたい．．．申し訳ないけど、肩を貸してくれるかな？」

「はい、どうぞ！」

そして私達は横倒しになった馬車から外へ出る。周囲を見渡そうとしたら、驚くべき光景が広がっていた。街道を走って港町へと向かっている筈だったのに周囲の光景は何処かの街のようで、しかし殆どの建物は傷ついていて、中には壁一体に何かの液体がぶつけられた様に赤黒くシミになっている所もあった。一体何が起きたって言うんだろうのこれは．．．私は夢でも見てるのかな．．．

「ねえ、リュミエス。私達は街道を走っていた筈よね？」

「その筈ですが．．．一体、これはどうなっているんでしょうか？　前に居たはずの御者も、

馬もいませんね．．．」

そう言われてみると、先程まで居たはずの御者と馬はまるでいきなり消えてしまったかの様に居なくなっていた。私は周囲に戸惑いつつも、意識を失っていた時の事をリュミエスに尋ねる。

「ねえ、リュミエス。私が意識を失っていた時、何か聞こえたものはあるかな？　リュミエス以外の声とか」

そう尋ねるとリュミエスは首を横に振り、私の質問に答える。

「いえ、私も姫様が目覚める少し前に意識を取り戻しましたが、私以外の声は聞こえませんでした」

「そう、では、御者と馬を探すことから始めましょうか。ここに来てからまだ時間が経つてないとすれば、近くにいるかも知れませんし」

「分かりました。では姫様は、私の傍から離れないようにして下さい。いざと言う時守れるようにしなければなので」

私はリュミエスの言葉に従い、少し距離を詰めながら移動を始めました。周囲の探索を初めて凡そ5分位でしょうか。リュミエスが何か反応し、私に1度止まるようにと合図を送りました。一体何があったのでしょうか。

「姫様、この路地を出た所に、何かの気配を感じました。ここからは慎重に行きますよ」

その言葉に私は頷き、少しづつ前へと移動する。すると路地を出て右側の道路の方

に、何やら人影がありました。私達からその人までの距離は凡そ15m位の距離があります。ですが、何か様子がおかしいです。なんて言うんだろ、その・・・そうまるで知性が無い獣の様な雰囲気か。「姫様ッ!」ええ?

グシャッという音と共に目の前に何か赤い液体が撒き散らされた。その赤い液体が目の前の地面いっぱい広がる、周囲に鉄臭い臭いが広がった。

「姫様!」ご無事でですか!?

「え、ええ大丈夫だよ」

リュミエスの言葉に気の抜けた返事を私は返した。そして、状況をやつと私は理解し始めた。目の前で潰れているこの人が、私目掛けて飛びかかってきたんだ。そしたらそれクレイモアに反応したリュミエスは腰に差していた大剣の重さを活かしてさっきの人を頭から

・っ!?

「いつ、いやあああああああ!?!」

目の前で起きた惨状に、私は叫んだ! 何せ、人が死ぬのなんて、今まで生きてきて1度も見たことが無かったからだ。こんなのに、耐性がある訳が無かった。

「ひ、姫様!?!」

「な、何よ、何なのこれえ!?!」

「姫様、どうかお気を確かに!」

私、リユミエスこと、リユミエス・カーグライトは後悔していた。先程まで15m程先に離れていた筈の男が、急に姫様に襲いかかろうとした。その為、私は躊躇せずその男の頭を大剣クレイモテの重さを活かし、叩き潰したのだ。しかし、この判断は間違えだった。そう、姫様はこのような事は生まれてこの方遭遇したことが無い。それも有り、この目の前の惨状を目の当たりにしてしまった為か、急に錯乱してしまったのだ。

「いやあ!? いやあああああああああ!?」

「姫様、大丈夫です! もう危険はありませんから!」

「何が大丈夫だ。結局、この事態は自分の判断ミスで引き起こした癖にクソっ!

自分のせいで姫様が

「何なのこれは! もういやあ!?」

「大丈夫です姫様! まずは落ち着きましょう!」

その直後だった。後方から足音が聞こえたのは。

「何だこれは」

俺・アキト・ラングレーは、目の前の状況を見て率直な感想がそれだった。

目の前には赤い軍服のような服と、ロングスカートを身に付けている赤髪のポニー

テールの少女が何やら錯乱<sup>クレーモア</sup>していて、もう一人の少女は白銀の甲冑<sup>ガントレット</sup>・と言うには少し装甲が薄いか。まあ、白銀の鎧と両腕に手甲を着けている黒髪のショートボブの少女が、錯乱した少女を宥めている。よく見ると、宥めている少女の手には凡そ150cm位の大剣。ああいうのは大剣<sup>クレイモア</sup>って言うんだっけか。まあそんなのを持っていて、足元には頭が潰れた感染者が血溜まりの中に沈んでいた。

すると、俺が見ているのに気づいたのかこつちを鋭い目付きで睨み、大剣をこつちに向けてきた。何でこいつこんなに睨んでくんだよ。つーかなんで俺は大剣《クレイモア》なんか向けられてんだ。そう思っていたら、その少女が口を開いた。

「貴様ツ！ 一体何奴だ！」

「何奴って。回収者<sup>スカベンジャー</sup>だけど」

「何だそれは。聞いたことも無いぞ！ それより、貴様は何をしに来たのだ！」  
 (うわあー。面倒臭エタイプだこいつ。)

正直に、目の前の少女に持った思いはそれしか無かった。こういう奴って大抵堅物なんだよなあ。俺が一番嫌いのタイプだわ。・と言うか回収者<sup>スカベンジャー</sup>のこと知らねエってどういふ事だよ。訳分からねエ。

「俺ら回収者は生存者を見つけたら、安全地帯<sup>セーフゾーン</sup>まで誘導しなけりやならねえんだよ。それが俺の目的だ」

「生存者。セーフゾーン。どのような状況かは知らないが、姫様に危害を加えるつもりは無いんだな？」

「ああ。つーか危害なんざ加えたらこっちが困るんだっつもの」

「そう言うとその少女は大剣を向けるのを止めた。すると、こっちに対して頭を下げてきた。」

「済まない、今少し取り込んでいてな。気がたっていた。本当に済まない！」

「まあ、謝罪してくんだったら別に問題ねえよ。んで、一体何があつたんだ？」

「ああ、それは。」

「そう言うって俺は少女に状況の説明を求めた。ざっくり彼女の言っている内容をまとめると錯乱してる少女は俺の知らねエ国のお姫様で自分は護衛の者。んで、彼女曰く魔族と亜人族と一緒に未開の大陸の調査に参加する途中でここにいたらしい。それで周辺の探索中に運悪く感染者に遭遇し、赤髪の少女を守る為に感染者をぶつ殺したらグロ耐性なくてアボン。と言った感じだ。」

「正直な所疑問しか無かった。特にそう思ったのが俺の知らねエ国の姫様ってとこと魔族と亜人族って所だ。なんだよ魔神族って。ファンタジー過ぎて何とも。それに姫様って何だよそれ。こいつらが日本から来たコスプレイヤーとかだったらまだ納得出来そう。でもねえな。わざわざ安全な日本を離れて自殺みてえなこと普通しないし」

な。取り敢えずは信じておくかっ!?!

「ん？ どうしたのだっ!? この気配は」

「のんびり話すぎたかっ!? おい、あんたら動けるか？」

「ああ、しかし姫様が」

「姫様がどうしたんだっ!? あア、そういう事か」

気付いたら姫様とやらは氣を失っていた。ショック受けすぎたってか？ この状況じゃあお荷物にしかなんねエじゃんかよ。しょうがねえ、殺<sup>ヤ</sup>るしかねえか。

## 3話

俺は即座に、装備していたAR—15の安全装置セーフテイを外し、奴らへ照準を定める。無駄に話し込んだしまったせいで、奴らが音を拾ってここまでやって来やがったからだ。

「おい、女騎士！ こっからは俺の指示に従ってもらうぞ」

「女騎士イ!? 私はそんな名前じゃないぞ！ リュミエス・カーグライトだ！」

「んじやあ、リュミエス。まず姫様を背負え」

「それは構わないが、手が塞がってしまうと、剣で攻撃はできんぞ」

「それは俺が何とかする。次は俺の誘導に着いてこい！ 俺が移動に使っているHMMWVハムツイまで走るぞ！」

その言葉に彼女・リュミエスは頷き、姫様とやらを背負い、何時でも行ける準備が整った。クソツタレが、さつきとこいつら連れてHMMWVハムツイに無理矢理でも押し込むべきだったな。無駄に弾薬を使う羽目になっちまった。

「俺の合図で突っ走るぞ。いいな？」

「ああ、了解した！」

「行くぞ」  
3、2、1、今だッ！」

その合図に俺達は全力で路地へと走る。すると、奴らも体を不規則に揺らしながら走り始めた。速度は遅いが、奴らにはスタミナという概念は無エ。つまりだ、奴らは俺達があへばるまで走り続ける事が余裕で出来ちまう。スタミナ勝負にすら出来ないもんだから本当に面倒臭エよ畜生がッ！

「てめエらは寝てろクソツタレが！」

俺達の後ろ以外にも奴らは迫ってくる。だから俺はAR―15を真つ正面に向け、<sup>トリガー</sup>引金を引いた。

パスパスパスと音が消音器により、最小限に抑えられた銃声が路地に響く。銃声は3発。どれも目の前にいる感染者の頭へ向けた射撃だ。普通だったら当たる事が無い射撃だが、俺は3発共全てを命中させた。

前にいた感染者はその頭から、腐っているのか色が変色した脳漿をぶちまけ、そのまま地面へ崩れ落ちる。その横を通り抜ける様に俺達は走り続けた。目的地まで後1kmつてとこかア？ クソが、本当に面倒だな。

「お、おい、少しいいか！」

いきなり後ろから着いてきているリュミエスから、いきなり質問をぶつけられた。何だよ一体、走ってるつーのによ。

「疲れっから、手短に喋れ！」

「なんなんださっきの射撃は！ 走っているというのに、全て命中じゃないか！ 風の精霊の加護でも受けているのか!？」

「なんだよ、そんな事かよ！ その質問は後にしろっつーの!」

・何だよ風の精霊って、そいつにでも射撃を手伝ってもらってのかよ異世界の奴は  
・すげえ便利じゃねえか。

「済まない！ 気になった事があるとな！ 目標まで後どれくらいなのだ?」

「後、1kmってとこだ。もう少しだが踏ん張れるよな?」

その言葉にリュミエスは強く頷いた。一応は騎士様って所か体力は余ってるみてえだな。さあ、もうひと踏ん張りだ。

私、リュミエス・カーグライトは驚きを隠せないでいた。何せ前で先導している男の腕前があまりにも卓越していたからだ。手に持っている武器は、どのような原理で動いているかは分からないが、クロスボウの様なものだと考えていた。だが、クロスボウは私達の世界にもあるが、あそこまでの腕前を持った射手を目にしたのは初めてだった。

私達の世界では、弓やクロスボウなどの射手は25m先の目標に当てればそこそこ。50から100m先の目標に当てられると中堅。150m先の目標を1発で仕留

められる腕があれば凄腕という認識だ。

だが、この男は50m程先の3体いた目標を、たったの3発で仕留めた。しかも5秒もしない内に3発で、だ。無論、そのクロスボウの様な武器の性能も有るのだろう。しかし、例えばどれほど良い性能の武器でも、腕が悪ければ当然ろくに当たらない。逆もまた然り。腕が良い射手であるならば、どの様な武器でも一流の腕前を見せるだろう。私はその男の腕前を見てこう感じたのだ。きつともつと遠くの敵ですら、ただの流れ作業のようにあつという間に撃ち殺せるのだろうな、と。

「これが、異世界の戦士だと言うの。」

その様な言葉をポロリと私はこぼした。すると男は、急に足を止め、こちらに向き直りながら武器を構えた。そしてこう叫んだ。

「HMMWVはこの先だ！ 鍵は空いてっからさっさと乗り込め！」

「貴方はどうするんですか!？」

「後ろっから来ている奴らの数が思ったより多い。そいつをある程度まで減らしたら行く！」

よく目を凝らして後ろを見ると、先程より数を増やした感染者とやらが迫ってきている。あの数を1人で何とかするつもりなのか!？」

「本当に大丈夫なのか？ あんな数1人では。」

「こつちにやまだ奥の手がある。そいつを使えばなんとかなるはずだ。早く行けつつかつ！」

その言葉に私は少し驚きながらも、はんぐいーとやらの場所へ急いだ。どうか無事であつてくれ。私達はまだ貴方の名前すら知らないし、礼も言つてないのだからな。

「ギアて。最後の二仕事と行こうじゃねエか！」

俺はそう言い、バックバックからあるものを取り出す。取りやすい場所に突っ込んでたおかげが、すぐに取り出せた。

取り出した物は粘土質の大きな塊と、リモコン制御装置付きの信管。そう世界的に有名な爆薬のC4プラスチック爆弾だ。そして俺は、C4爆弾を少しづつちぎり、取つておきの秘策を仕込んでから信管をセツトして路地の壁や地面に貼り付ける。

だいたい作業が終わつたのは、作業開始から2分程。さつきまで遠目にいた奴らは、凡そ100mまで詰めて来ていた。すぐに俺は路地の出口へと出て、壁際から起爆のタイミングを測る。

「よーしよし、そのまま、そのままだ。」

そう呟きながら俺はスイッチへと指をかける。後、  
 5、<sup>ファイブ</sup> 4、<sup>フォー</sup> 3、<sup>スリー</sup> 2、<sup>ツー</sup> 1、<sup>ワン</sup> 今だツ！  
 その瞬間体を引つ込め、スイッチを何度も押す。

「信管に電気信号が送られる。その瞬間、C4爆弾は一斉に爆発した。ドカドゴズゴンッ！」と連続で爆音が聞こえる。少しして爆風が散り、爆心地がだんだん見えてくる。

そこには四肢や頭を失った感染者達が死体となって倒れていた。中にはまだ生きていて、呻き声をあげているやつもいる。しかし、生きている奴らの全員に共有しているのは足はザクロの様にズタボロに引き裂かれている事だ。

そう、それこそ俺が仕込んでおいた秘策の効果である。原理はクソ簡単で、ただC4爆弾の中に12ゲージ用の球ボールベアリング弾形弾を混ぜるだけだ。そう、俺は簡易的にはあるが即席クレイモア地雷を作ったのだ。本来だったら爆弾の周りに鉄板とかを仕込んで正確な指向性を持たせたかったが、無事に成功したので良しとする。

「ざまあみやがれクソツタレ共。一生そこで寝てろ。」

そう俺は吐き捨てて、HMMWVハムヴィへと向かった。

## 4話

・ ・ ・ ?

「う、うん」

「ひ、姫様」

「やつと眠り姫が目覚めた、ってか？随分と遅い起床なこつて」

「私が目を覚ますと、そこは何かの乗り物の様な物に乗っていた。見た感じからすると、鉄で出来た馬車の様な物かな。隣には、リュミエスがこつちを見て既視感デジャブを感じる表情で、私を見ていた。どうやら、話の感じからすると長く気絶していたみたい。そして、もう一人の声があった方へ、私は顔を向けた。

その人はどうやら男性で、何やら操作しているみたい。ぱつと見た感じ、私達より歳上だろうか。少年って言うよりは青年って言った方がしっくりくる外見だ。頭には薄緑色の帽子、目つきは鋭いけれど目は死んでいる。顔は細かい切傷が多く、かなり戦い慣れていそうな感じだ。

「姫様、体調はどうでしょうか？まだあまりよろしく無いでしょうか？」

「んっ？あー、えっと、特には問題ない、かな」

「そうですか。良かったです」

そう私が答えると、リユミエスは安心した表情を浮かべる。またこの子には、迷惑をかけちゃったな。私の精神が強ければ、ああいうのに耐性があれば良かったんだけどな。これからは気をつけなきゃ。

そう考えながら、ふと思つた事がある。そういえば、この男性は一体誰なのか、と。私は前で何かを操作している彼に聞くことにしました。

「助けて下さり、本当にありがとうございます。私の名はフェリエラ・フボン・アークライドと申します。よろしければあなたの名前を伺つても良いでしょうか。」

すると彼は、面倒くさそうな顔をしながらも教えてくれました。案外、面倒見のいい人なのかな？

「あー、俺の名はアキト・ラングレー。助けたつつても、あんたらを見捨てることつちが損になるからな。だから礼なんざ要らねえ。」

「そうぶつきらぼうに彼は言う、視線を前に向きました。」

「恥ずかしがり屋さんなのでしょうか？」

「あー、差し支えながら、この馬車？はどちらへと向かっているのでしょうか？」

「数少ねエ安全地帯の1つに向かつてる。俺の仕事は、そこまであんたらを誘導することだからな。」

「そうですか。お手数、お掛けします。」

そうすると、彼は驚いた表情をこちらへ向けました。何か私が言ったことがおかしかったのでしょうか。本当に、なんでだろう、と思っていると彼が話しかけて来ました。「あんた姫様だつてな。異世界の」

「へ？ああ、はい、そうですね？」

「てつきり王族つてんだからふんぞり返つてるもんだと思つてたが、あんた偉く腰が低いな」

「あはは。こればかりは性格ですから。父からは、もつと堂々としてもいいんだぞ、とはよく言われますね」

「へエ、変わつてんだな」

そういうと、また前へと向き直り、馬車を操作する何か。なんなんでしょうか、あれ。手綱みたいなものなのかな。あれ？というか、この人今さうき異世界の、つて言つてましたよね？

「ねえねえ、リュミエス。彼には私達の事つて説明しているのかな？」

「えつと、はい。説明を求められていましたからざっくりとですが」

「この世界つて、私達の世界とは違う場所にあるのかしら？」

「？どうしてですか姫様」

「だって、彼は私のことを異世界の姫様つて言っていましたよ？」

私のその言葉でハツと気づいたのか、リユミエスは驚愕の表情を浮かべました。この子って、結構思い込みが激しいし、たまに物事を見逃していることがあるよね。その言葉を聞いていたのか、彼アキトさんが私の疑問に思っていた事に返答してくれました。

「いやさ、あんたが姫様やってるアークライド王国だっけか。俺はそんな国、1度も聞いたことも無エし、見た事も無エからそんな感じかと思つたんだよ」

「そうなんですか？」

「ああ。現実的じゃねエとは思うが、日本ジャパンから来たコスプレイヤーがそんな設定振りかざしてんのかとも思つたが、わざわざ安全地帯からこんなクソみてエな場所に来るかつて考えたらそつちの方が無エつて感じたしな。」

この人、無愛想に見えるけれど案外おしゃべりなのかもしれない。そう私は、彼の返答を聞いて思いました。でも、異世界かあ。確かに、それだといきなりこんな場所にいたつても領けるかな。一体、誰が転移魔法を使用したか理由は分かんないけど。誰かに、恨みを抱える様なこと、私したかなあ。姫様、どうなされましたか？」

「いやさ、ここが異世界だとしてもさ。一体誰が転移魔法を行使したのかなあつて考えていただけだよ」

「まさか、姫様を狙つてという事ですか!? くつ、姫様相手にこの様な仕打ち。首謀者は必ずや仕留めてみせましょう!」

「あはは、それをやるにしても先ずは帰る方法を見つけなきやだね」

私がそう返すとリュミエスは「確かにそれはそうですね」と言つた。この子、いい子何だけどね。たまーにポンコツちゃんになつちやうんだよなあ。まあ、そこが可愛いんだだけね!」

「おいお2人さんや。乳繰りあつてねエで降りる支度をしてくれ。そろそろ目的地に着くからよ」

その言葉に私はハツとして、リュミエスと一緒に降りる支度を始めました。そうだが、先ず帰る方法の前にこの世界での拠点を手に入れなきやいけないなあ。お金、どうしましょうか。この世界の通貨なんて持つてないしなあ。私の持つている物、高く売れるといいですけど。

さつきまでは色々やばかったが、何とか無事に着いたなあ。あー、今日は無駄に疲れた。さつきとこいつらをギルドへ連れてつて、家でゆっくり酒でも飲んで寝るか。

俺はそう考えていると、安全地帯セーフゾーンの1つであり、西海岸でも有数の大都市であるシアトルへと到着した。シアトルといえば昔だったらマイクロソートやamazonとか

の本社があつたり、シアトル・マリナーズというメジャーの球団があつた場所だ。あ、こんなご時世ともにスポーツやら出来る訳もなく今じゃ球場は避難民の住処しかねエ。マイクロソ<sup>○</sup>トや a m a <sup>○</sup> o n も当然物資がなきや仕事にすらならねエからとつくに潰れているがな。

兎にも角にも、早いとここいつらをギルドへ送らねエとな。もうくつたくただせ畜生。そう思いながら検問所の入口へ H M M W V を向かわせる。感染者が街に入つて来ねエ様に街の周囲には、高さ約 10 m 位の壁で覆われていて、その壁を登る以外にこの街に入るには 2 箇所しかねエ検問を通るしかない。当然、検問所はアメリカ陸軍の生き残りが中心に警備にあたっている。

「よオウエンバース。通行許可を貰いてエンだけど」

もう既に顔馴染みになつている検問所を警備している兵士ウエンバース・ジョンソンに話しかける。こいつとはたまに飲みに出かけるくらいには仲はいい。気さくな性格してつから取つ掛り安いのだ。

「おうアキトじゃねえか！ 今日もお疲れさんだな。ん？ 後ろの席に居るかわい子ちゃん達は一体なんだあ？」

「街の外で拾つた生存者だよ。見捨てる訳にはいけねエから仕方なくな。」  
するとウエンバースは嫌らしい笑みを浮かべて話しかけてくる。何だよその面。

なんでそんな嫌らしい顔し始めてんだよ。

「いやあくアキトくうん。こいつは大手柄じゃねえかよおく？まさかお前がこんな可愛い子達を連れてくるとはなあゝいい仕事したじやんか！」

そういう事かと俺は納得した。こいつは天性の女好きだつてのを今思い出した。大方、後でナンパするつもりなんだろうよ。だからいい仕事したってことか。

「ナンパすんのは構わねエがよ、あつちのショートボブの子には気をつけな。もう一人の子に迂闊な事言っちゃまうと切られかねん」

「うへえまじかあ。まっ、気をつけとくさよし、通行許可降りたぞ」

ウエンバースがそう言う俺は「ありがとな」と礼を言い、HMMWVを走らせた。やっと家でゆつくり出来そうだぜ。

——10分後。

「悪いけどこの子らの住む場所何だけどねあんたのここにしばらく泊めてもらつてもいいかしら」

「はあ」

.....  
どうしてこうなったッ！

## 5話

「ここが回収者連合だ。やつとここここまで来れたな」

スカベンジャーギルド

目の前にある大きめの建物をアキトさんは回収者連合と言った。ギルド私達の国にも冒険者組合と言うのがありましたけど似たようなものでしょうか？

アドベンチャーズギルド

「アキト殿。どうして私達をここへ連れてきたのですか？」

「ここだったら、住む場所がない生存者はギルドから斡旋してもらえんだよ。あんた

らは少なくとも、この世界には拠点になるようなもの無エだろ？」

「本当ですか!? ですが、家賃というものが借家にはあると聞いたことがあります。それはどうすればいいでしょうか？」

そう私が質問する。確かに住む場所を用意して頂けるのなら有難いですが、今の私達には先立つものがありません。

「よく姫様なのに知ってんなア。まあ、取り敢えず姫様、何か売れそうなモン持ってねエか？」

「売れそうな物ですか。今の私にはこれしかありませんけど、売れるんでしょうか？」  
 そう言いながら、私は懐にある収納魔法から宝石一つを取り出す。これはお父様から

「現地にもし人がいたとしたら、親交の品として使いなさい」と渡されていた物ですが、背に腹は代えられません！」

「お、持つてんのか。んじやあそいつをギルドで換金しまおう」

「はい。私には価値があまり分かりませんが、もしかしたら高いお値段で売れるかもですからね」

そして、私達はアキトさんに連れられてギルドの中へと入っていきました。

ギルドのドアを開け、受付に向かう。ここの受付に今日の回収出来た物を渡せば、食料や弾薬、アメリカドルに替えてもらえる。

食料か弾薬、アメリカドルはどれに替えるかは個人の自由になっている。ただし、1日で貰える数は決まっているがな。そりや当たり前だろうな。食料も弾薬も金も有限だ。ゲームみてエに無限に替える事なんざ出来るはずもないからな。

「ジェニファー、今日の回収した物だ。今回は弾薬と替えてくんねえか？ 5. 56×45 NATO弾はこれで何発と交換出来るんだ？」

俺はそう言い、回収者連合の看板娘であるジェニファー・アルフレッドに話し掛ける。ジェニファーとは2年前、俺が回収者連合に初めて物を交換しに来た際に出会ってからの腐れ縁だ。あん時は俺もこいつもまだ新米だった。もうとても昔だったかの様に感

じれる。

「あら、アキトね。今日はえらく早いじゃないの」

「ああ、回収中にこいつらを拾ってな。早めに切り上げたんだ」

俺はそう言い2人を指さす。フェリエラはスカートの裾を掴み少し上に上げた上流社会の人間ですつて感じの礼。逆にリュミエスは右手を左胸の前に持つてきて、そのまま礼をする。こつちも騎士らしい礼をしていた。すると、ジェニファーが顔を近づけて、小声で話してきた。

「ねえねえ、なんであの子達はコスプレなんかしてるのかしら。そういう趣味なの？」

俺もその答えに小声で返す

「まあ、そんな感じだ。出来りやああんま触れないでやつてくれ」

「OK。そういう事ね」

すると、俺達が小声で何か話しているせいか、フェリエラが近づいてきた。多分、何を話してるんですかー的なのを言うんだろう。

「あの一・アキトさん？ 一体そちらの方と何を話しているんですか？」

やつぱりだ。「この姫様案外単純なのかも知れねえ」と、俺は思った。まさか本当に聞いてくるとはな。めんどくせえし適当な事言つて誤魔化すか。

「ん？ いや、なんだ。お前のそういう仕草が綺麗だよなーって」

「ふええ!」

「なんで顔真っ赤にしてんだ? と思ったが、今適当に言ったことを思い返す。ウエンバースじゃねエがキザつたらしいこと言ってるな俺。まあ、訂正すんのも面倒だしこのまま勘違いさせとくか。っていうか睨むなよりユミエス。特に何かするって訳じゃあねエんだからよ。」

「まあ、とりあえず話は戻すけど、今回の回収分だと凡そ100発って所かしらね」

「ジェニファーは面倒だと思つたのか一旦話を戻す。まあ、そんなもんか。今日はあんまり回数出来なかったしなア。これで暫くは何とかなるか。」

「んじゃあこいつらの事頼んでいいか? 正直もう今日は疲れた」

「そういう訳にもいかないのよ。あんたにはここまで一応は誘導してるんだから、フリーとは、いえ報告書に誘導した本人のサインが必要な」

「まじか。まあしようがねエか。分かったよ」

「あーだる。幾ら必要とは言えこんな世界でもお役所仕事は無くならないってか? まあ、サインする迄適当なベンチで少し寝るとすつか。」

「OK、取り敢えず貴方達の名前と、住んでいた場所を言つて貰えるかしら」

「ジェニファーさんはそう言い、メモを取る姿勢になっている。取り敢えず、アキトさ

んが言つてた通りにしましょうか。

「はい。私の名前はフェリエラ・フオン・アークライドと申します。元々はオレゴン州の方に住んでいました。こちらは友人のリユミーです」

「はい！ 私はリユミー・カークライドです。私もリエラと同じくオレゴン州に住んでいました！」

「オレゴン・ねえ。大変だったでしょ、貴方達」

「まあ・そうですね。この前ので私の家族もリユミーの家族も亡くなりましたから」

そう、私は言いました。何故本当の故郷を言わなかったのか、それはここへ来る前にアキトさんから言われていたことがあったからです。

『絶対に異世界の事は言うなよ。迂闊に状況が混乱するのは面倒だからな。いいか、名前と住んでた所を聞かれるだろうが』

異世界の事を言えば、最悪、私達の事を何か良からぬ研究に利用されたりするかもしれない。何故そこまでするかと言うと、謎の感染症は異世界人ならば効かないかもしれない、と考える奴がいるかもしれない、とアキトさんは言っていました。そんなことをしてしまう程人類は追い詰められているらしいです。

所で、何故私達の出身をオレゴン州と言えと言われたのかは、つい先週の事らしいんですが、そのオレゴン州に残っていた街が遂に全滅してしまつたからです。その全

滅した街から命からがら。という風にすれば怪しまれずに家が借りれるかもしれないかららしいです。でも、やっぱり嘘をつくと言うのは、良心の呵責を感じます。

「よし、OKよ。取り敢えず空き家が無いか探してみるわ」

それから私達は他にもいくつかの質問がされました。歳は今年でいくつか、犯罪歴はあるか、今までに感染者に噛まれていないかなどこの街に住むにあたり、必要な事が質問されました。私は何とかスラスラと答えられました。リユミエスは所々言葉が詰まったりする事はありましたが、何とか通つたみたいです。質問が終わり、少しほっとしていた所、リユミエスが小声でこちらに話しかけてきました。

「姫様、先程は失礼しました！」

「え？。リユミエス、何かしましたっけ？」

「いえ。幾ら抛点を手に入れる為とはいえ、姫様を渾名で読んできましたからです。王族である姫様に、とんだご無礼を。」

ええー。そういうのやっぱり気にしちゃうの？ 別に私としては渾名で呼ばれるって言うことがあんまり無いからなんだけど、普通に嬉しいのになあ。いつその事、これからもずっと渾名でリユミエスに呼んでもらおうかな？

「別にいいんだよ？ その代わり私もリユミエスの事リユミーって呼んでもいい？」

「ええっ!? そんな勿体なき言葉！」

「わーっ！ 声大きいってば！ もっと小さな声で！」

「し、失礼しました。これから姫様に渾名で呼んでいただけると思うと、とっ、とても身に余る光栄で、つい。」

もーいきなり叫ぶんだもん。周りの人にめっちゃ見られてるよー。ちよつと恥ずかしいなあ。まあ、でもふふつ、やっぱ可愛い反応するなありユミエスったら。

「んんツ、それで、私の事リエラって呼んでくれる？」

「でつ、ですがひめさ「だーめっ」分かりました。それではその、んんツ、えつと、リエラ。」

「ふふつ、よろしい♪ それじゃあこれからはそう呼んでよね！ いい、リュミー？」

「ふえっ!? あつ、はい！ 分かりました！（姫様が私の事をリュミーと呼んでくれた。なんとという幸福感！）」

「そう私が言うどリュミーは顔をすつごく緩ませながら返事をした。やっぱり顔によく出るよねーリュミーって。そう思っていると、ジェニファーさんが戻ってきた。物件、見つかったのかなあ？」

「えつと。取り敢えず空き家の件なだけどー。もう暫く待つて貰えないかしら？」

あれ。見つからなかったのかな？ ジェニファーさんは気まずそうな顔でそう言った。

「そうですかー。分かりました。どれくらい待てばいいですか？」

「最低でも1ヶ月。って所かしら。今空き物件が無くて、仮設住宅の在庫も切らしちゃっててね。」

「1ヶ月かあー。長いけど、しょうがないか。でもそれまでどうしようかなあ。野宿になるのかな？」

「そんなに長くかかるんですか!? どうにかありませんか？ ひめs。ゴホン、リ、リエラを野宿にはしたく無いんです! 私ならともかく!」

「私は別に良いんだけどなあ。後、やっぱり私を渾名で呼ぶのはまだ慣れないみたいだね。ほんとにリアクションが可愛いなあ。」

「そうねー。でも、今空いている物件なんて無いしなあ。あつ、そうだ!」

「ジェニフアーさんが何か思いついたみたい。一体どうするんだろうか？」

「貴方達の家が確保できるまで、アキトの家に泊まってもらえばいいじゃない!」  
ええっ!?

## 6話

・ ・ ・ どうしてこうなったッ！

・ ・ ・ ジェニファーに呼ばれたからさつきとサイン書いて帰るつもりが、なんでこいつらを家に泊めるって話になってんだア!? 全くもって意味が分からねエんだけだよ。

「いやね、最初は空き物件に住んでもらうつもりだったのよ。でも用意できる物件が仮設住宅だとしても、最低でも1ヶ月は用意に時間がかかってしまうのよ」

・ ・ ・ まあ、それは分かる。こういう事はここでは割かしある方の話だ。何せ、1ヶ月に平均50人ずつ住民が増えていく為か、土地や物件が足りなくなることがある。まあ、大抵空き物件になる時は回収者スカベンジャーが拠点にしていたが回収中に死亡したため空き物件になるケースや、普通に住民が老衰や病死等で部屋が開くケース等色々ある。

「でも、あんたの家って確か広めだったでしょ? 2人増えたって問題ない筈だけど」

「そういうの話じゃねエってんだろがおい。なんで俺の家に泊めるって話になってんだよ」

「・ ・ ・ しょうがないじゃない? これしか解決方法見つかなかったんだから」

・ ・ ・ そう、何故か俺の家に2人を泊まればいいという事になっていた。俺的には反対な

「ただ、女2人を野宿させないといけねエもんだからジエニファーが反対しているのだ。」

「はア、一応聞くが2人はどう思ってるんだよ」

「そこで俺は2人に話を振る。流石に未成年の少女でもあるこいつらだったら男と一つ屋根の下つていうのは嫌がるだろう。」

「え、つと私は、問題ないです。」

「え？」

「ひmリエラがいいと言うんだったら、私は問題ありません！」

「はア!? どういう事なんだこれはよオ!? 普通だったら嫌がるはずだろ! なんてフェリエラOK出してんだよおおおお!? そんな事言えばリュミエスなんざ姫様が良いのでしたらつて言うに決まってんじやねエかよ!」

「2人はOKみたいよ? 本当に、お願いできないかしら? 幾ら割と治安のいいシアトルだとしても、女の子2人が野宿なんてあまりにも危険すぎるわ」

「はア」

「くそツ、そう言われると、反論し辛エじやねエかよ。そう、このシアトルは他の安全地帯と比べれば、比較的治安のいい方だ。だがこの世紀末みてエな世界。女だけで生きるにはきつい世界だろう。まあ、リュミエスがいれば貞操と身体は守れそうでは

あるが。

「あの、駄目、でしようか？」

フェリエラが不安そうにこちらを見つめ、そう言ってくる。クソが、この視線で見られると駄目だつて言えねエだろうが。女つてこういう時は卑怯だ、と俺は強く感じた。

「だアーツ、くそツ！ 分かった、分かったよ、住んでも問題はね無エよ。だからその目で見るとんじやねエよ。」

そう俺が答えるとフェリエラは少し申し訳ないって思っているであろう顔と良かったという安堵の混ざった顔で俺を見る。だから見んじやねエつての。

「決まりね、んじやあこの子達はあんたの家に泊まるつて事で。こいつはあたしからの謝罪料込の今回の報酬ね。」

そう言い、ジエニファアは俺が頼んだ5.56mm NATO弾100発とパーツ毎に分解はされているが、ベネリM3ライオットショットガンを渡してきた。ベネリ用の12ゲージ70発も付けて。つておいおいおい

「こいつは流石にやべえんじやねエか？」

「いーのよそんな事。第一、こいつはあたしの私物だから」

これが私物とかこいつ、思つてたより凶暴なのかもしれねエな。まあ、くれるつて

んなら有難く頂戴するが。

「んじやあサインはこれで良いんだな？」

「ええ、大丈夫よ。面倒事押し付けちゃってごめんよ？」

「面倒事って思ってるんなら押し付けるなつての。まあ、しょうがねエさ。何とかなるだろ。」

「あ、そうだ。こいつを頼まねエとやばいな。そう思い俺は小声でジエニファーに依頼をする。」

「後でいいから、こいつらの服とか下着、見繕つといてくれねエか？ 流石にこればっかりはどうしようもねエ」

「ああ、確かにそれは必要だね。OK任せなさい。後で2人に渡しておくわ」

「本気で頼んだぞ」と念をいれておく。流石に女性の下着とかを選ぶ勇氣は俺でも無エ。そんなくらいは良いだろ。と思い、俺は2人を家に案内した。

ギルドから歩いて15分位でしょうか？ 平和な世界だったら素敵な住宅街だったんだろうけれど。今は、暗いというか、閑散とした雰囲気のある住宅街になっています。しかも、所々崩壊したままで放置されている住宅もあります。

その住宅街の中心位の場所に、アキトさんが今暮らしている家がありました。

王宮

と比べるのは間違ってるけれど、やっぱりちよつと小さいかな？ いや、一人で暮らすのだったら広すぎるんだと思うけれど。

「取り敢えず、入口はこつちだ」

「あつ、はい失礼しまーす」

「失礼します！」

アキトさんに促され、取り敢えず家に入りました。うわあー、ちよつと掃除した方が良いんじゃないかなあ？ 入ってみると少し壁や床が汚れている状態で、廊下には物資なのか、箱に詰められた状態で並べられている。

多分、アキトさんは寝ることと、物資が置ければ問題ないって考えなんでしょうね。取り敢えず、家のお掃除から始めないといけないなあ。折角泊めてもらうんですから、恩返しも兼ねて、頑張らないと！

「まあ、色々と散らかってつけど着いてきてくれ。お前らの部屋に案内する」

「あ、はい。分かりました」

「了解です。所で、掃除とかはされてるんですか？」

リユミーがそう言うのと、アキトさんは少し痛い所を突かれたなつという感じの表情をみせ、話し始めます。

「あアー、最初の頃はある程度はやってたんだがな。最近は何となく立て込んでな、全

然やつてねエ」

「やはりですか・では、私たちが泊まる部屋も？」

「悪い、物置程度にしか考えてなかったから全然・一応、ここがお前らの部屋だ」

そういうと、2階の角の部屋でしょうか、ここが私達の部屋みたいです。ドアを開けて中を見てみると・うわあ。すつごい事になってる。

中はごちゃごちゃと、物資がそこらかしこに置かれていて、足の踏み入れる事ができるスペースがかなり少なくなっています。物資の上にはうつつすらと埃が被っているので、本当に暫く使っていないお部屋みたいです。

「悪い、1番でけエ部屋がこししかなくてな。ちよいと時間はかかるが、掃除すつからよ。下でゆつくりしててくれや」

確かにこのお部屋の大きさは、2人で過ごすには充分な大きさです。ですが、この広さを1人で、更にここに貯めていた物資を他の所に移さなければいけません。流石にアキトさん1人でお願ひするのは申し訳ないですね・よし！

「いえ、私に掃除をさせて下さい！」

「姫様?!」

「別にいい。俺が判断しねエといけないもんあるからよ」

「確かにそうですけど、私は助けて頂いただけでなく新しい物件の用意が終わるまで、

「この家に泊めてもらうんです。それくらい、任せてください！」

「暫くアキトさんは黙っていました。少しして「しようがねエな。分かんねエもんがあつたら呼べ」と言い、階段を降りて行きました。よし、頑張るぞ！」

「私もお手伝いします、姫様」

「ふふつ、ありがとうリユミー。それと、私の事はリエラつて呼んでつて言つたでしょ？」

「はっ。申し訳ありません！ つい。」

「あはは！ 大丈夫だよりユミー。これから慣れていけば良いからね！」

「はい！」

「そう言い、私達は掃除を始めました。分からないものはアキトさんに聞きながら掃除していきます。2人で掃除をするのでほんの2時間で掃除は終了。そこからはアキトさんが掃除中につけていた料理を頂き、2人で寝る準備をし、少しして眠りました。明日から、元の世界へ帰る方法を頑張つて見つけなきゃね。」

## 7 話

朝の5時半。普通だったらこの時間から起きている人は少ないだろう。だが、俺はその時間に起き、身支度を整え地下室へ向かう。この家は地下1階、地上2階で構成されている。地下1階と言っても一部屋しか無エが。

何故俺が地下室へ行くのか。それは、仕事に関係したものを地下に置いてあるからだ。

「ふあああ、眠イ。」

眠い目を擦りながら、俺は地下室に置いてある物資を手を持つ。それは、俺の仕事道具であり、命を預ける相棒だ。しっかりと整備しねエと、いざつて時に俺は死ぬことになるからだ。

AR—15を手を持ち、マガジンキャッチを押し弾倉を抜く。この時、忘れずに薬室内にある1発の弾丸をチャージングハンドルを引き、取り出しておく。銃を使う奴からしたら当たり前だが、整備中の事故防止の為だ。

そうしたら、安全装置レバーの右隣に付いているテイクダウンピンを抜き取り、引鉄部分から機関部を取り外す。銃の機関部は、銃の心臓部と言っても過言でも無エ。ここ

の整備を怠れば、弾詰まりや給弾不良を引き起こす可能性がある。そうなっちゃまうと、銃は役立たずの鈍器に成り下がる。それは即ち、感染者達の餌になるのも同義だ。

だからこそ、機関部はより丁寧に整備しなけりやあならねエ。俺だつて、整備不良で死ぬなんざ死んでも死にきれねエ。その後は機関部を分解する。

チャージングハンドルを引き、機関部からボルトキヤリアーを抜く。チャージングハンドルもその時点で取り外しておく。その後には、ボルトキヤリアーから撃針を取り外し、磨耗具合を確認する。こいつが摩耗しすぎた状態で放置すると、引鉄を引いても、雷管が叩かれなくなる。つまり、銃弾が撃てなくなるつてことだ。それを防ぐ為に、定期的を使用した後は磨耗を確認し、かなり摩耗していたら新品の撃針と交換する。今回はついこの間に交換したばかりだし、あまり撃つてねエから交換の必要はいらな

い。

次は、引鉄の動作確認とマガジンキャッチの確認をする。その次は清掃に入る。機関部分や銃身に付いている燃焼ガスの汚れを取る。銃身は当然指が入らねエから、ここはクリーニンググロッドを使用した清掃をする。その後は潤滑剤を柔らかく塗った筆や布に付け、機関部等動作する部分に薄く塗り込んでいく。これを行う事で、銃の動作自体がよりスムーズになり、排莖等がしやすくなるからだ。

それらの作業を終えれば、後は組み立てるだけで終わりだ。ここまでの作業時間は凡



到着した。ここは昨日フエリエラ達を拾った街でもある。いきなりの事だったから、全部は回収できていねエ。今回はそれを回収した後に、別の街へと向かう。そうすれば、あいつら暫く食ってけるくらいのメシは手に入るだろ。食費が嵩むつてのは、案外面倒だなこれ。

「よし、行くとすつか」

「そう言い、俺は相棒を構えながら、街の奥へと入っていった。」

「回収を始めてから凡そ2時間程だろうか、ふいに近くに気配を感じた。間違いねエ、奴らだ。数はおそらく15といったとこだろう。丁度、俺の進路上に固まって動いている。」

「なんで迂回路が無エ場所にたむろしてやがるんだクソツタレが。仕方ねエが、殺しかねエな。固まって動いてるってんなら、こいつで一気にミンチだな」

「そう言い、俺は弾帯からある物を取り出す。それは直径15cm位の球で、上端部にはレバーとピンが取り付けられている物だ。そう、取り出したのは手榴弾だ。こいつの分類は破片手榴弾というやつで、火薬の爆発だけじゃなく、細かい金属片を勢い良く飛ばし、目標をスタスタに引き裂く効果がある。」

「俺は取り出した破片手榴弾のピンを抜き、レバーごと破片手榴弾を握る。これでレバーから手を離せば、時間差で起爆する状態になった。」

「これでも喰らえ、クソツタレ共が」

俺はそう吐き捨てながら、レバーから手を離し、2秒ほど待つてから破片手榴弾フラッググレネードを投擲した。こうすることで、起爆のタイミングがずれ、奴らのど真ん中で爆発する

次の瞬間、パガンツ！ と火薬が破裂する音が聞こえ、奴らのど真ん中で破片手榴弾フラッググレネードが炸裂した。飛び散った金属片は、爆発によって生じたエネルギーにより拡散。奴らの顔や身体などをズタズタに引き裂いた。少ししたら爆煙が晴れ、爆心地が見えてくる。そこには、頭や胴体がズタボロになった死体達が転がっていた。良し、狙い通り全滅したな。

その光景を見届け、俺は周囲の警戒に入った。迂回路が無かった為仕方なく手榴弾グレネードを使用した。奴らは音に引き寄せられる。つまり、いつ奴らが襲ってきてもおかしくなくなつたのだ。

「はア、仕方なく奴らを爆殺したけれどよ。本当に、面倒事しか持つてねエな感染者つてのは」

そう愚痴りながらも警戒を続ける。すると後方から気配を感じた。クソツタレが、もうお出ましつてか？ 本当に来んじやねエよクソ共が。

「まア、来るつてんだつたら仕方ねエ。全員ぶつ殺すまでだ」

そう毒づき、俺は相棒A.R.I.S.を構え、奴らのドたまをぶち抜く為に、引鉄を落とした。

——5時間後 シアトル検問所にて

「ありやまあ、こりや又派手に殺つてきた感じかアキト？」

「ああマジで最近ついてねエよ畜生が。昨日交換した弾薬迄消費させられちまったよ」

「そりやあツいてなかつたな兄弟？」

全くだと、俺はウエンバースに愚痴を言った。結局後は、更に奴らのおかわりがやつてきやがった。もしかしたらあの街の感染者、全員ぶつ殺したかもしれないの相手をする羽目になった。今思い返すと、普通にAR-15には消音器サブレッサー付いたのに何故手榴弾グレネードを選択したんだよ俺は。お陰で馬鹿みたいに弾薬消費しちまったじゃねエかよ。

「はア、本当にツいてねエな、俺」

そう言いながら、俺はあの時の選択ミスを後悔していた。

## 8話

私達がアキトさんの家に泊めてもらい始めてから、4日が過ぎました。私達の世界からこちらの世界に転移してから4日でもありません。ここに泊まり始めてからは色々な事が新鮮で、新しい発見の日々です。

先ずは毎日頂いている食事の料理では、かんづめというとても便利な物がありました。アキトさん曰く「缶詰ばかりじゃなく、もつとましな食事を用意できりや良かったんだが」と言っていました。そんなに良くないのでしょうか？ 味はとても美味しいですし、色々な種類があつて飽きることはありません。私が特に気に入っているかんづめはつなというものが入っている物です！ リュミーにも今の所気に入つてるを聞いてみたら、おれんじというかんづめと言っていました。

因みにかんづめを初めて見たリュミーが「これがこちらの世界にあれば」とこぼしていました。確かに、持ち運びも便利ですし、長持ちするので旅のお供にはピッタリですもんね。私達の国へ帰ったら、缶詰を作つてみようかな？ でも金属を加工つてなると専門家に聞くしかありません。

次に驚いたものが、キッチンにある「んろ」というものです。魔力も一切無いのに、す

いっちと言ふ物を回したら、いきなり火が起こつたんです！ 私達の世界では、魔道具  
 だったら同じ効果を持つているものを一度、見た事がありました。が魔力が操作出来なけれ  
 ば火を付けることが出来ません。これも私達の世界にあれば、態々木をくべなくても  
 済むのになあ。この世界つて凄いな。

他にも、れいぞーこという物やでんきと言ふ物を使つて灯りを付ける装置、水や温か  
 い水が出せる水道、がそりんと言ふ燃料を使つて動くじどーしゃ等、色々ありました。  
 因みにこちらの世界へ転移して、ここに来るまで乗つていたものがじどーしゃだつた  
 と聞き、改めてこつちの世界の技術力の高さを実感させられました。馬や牛を使わな  
 くて動くんだから、本当にどうやったら作れるんだろう？

そうそう、アキトさんが持つていたクロスボウみたいな物の事を聞いた所、じゅうと  
 言う名前でした。どうやらこのじゅうについて今日教えてくれるらしいです。アキト  
 さん曰く「毎日回収スカベンジするのは流石にきちイから休みにするつもりだ」と言つていました。  
 ・毎日あんな場所で、物資を届けて得るために戦つてゐるんですよ。本当にすごい  
 よねアキトさんつて。私達がお手伝い出来たら良いんだけどなあ。だからこそ、今  
 回じゅうの使い方を聞くというのもあります。魔術は一応ある程度だつたら使えます  
 けど、私、魔力に関して言えば平均より少し下位の出力なので、あまりお役に経つとな  
 れば、戦闘では足を引つ張つてしまふですよ。でも、じゅうさえ使えれば、きつと

私にも

明日は休日にするか、と考えていた所にフェリエラが「銃について教えて頂けませんか?」と言ってきた。俺としたら明日一杯完全に身体を休めるつもりでいたが、なんでもだろうなア、こいつの頼みはなんか断れねエ。本当になんてかは知らねエ。何故かそう、としか言い様がねエからだ。まあ、他の誰かになんか教えるつても気分転換にはなるか。

翌日、アキト宅 リビングにて

「よし、んじや銃についての解説を始める。分かんねエ所がありやあ好きに聞け。ある程度だったら答えられるしな」

そう言い、俺は解説を始めることにした。リビングの机にフェリエラ、リュミエスが椅子に座り、机の上に置いてある銃を挟み、反対側の俺は何故かあったホワイトボードの前に立っている。話を聞きたいつつつたのはフェリエラだけだったが、「私にもどうかこの武器について教えて欲しい!」と、リュミエスも言ってきたのでまとめて説明した方が楽だと判断し、同席を許可した。

でも、なんでフェリエラは銃なんぞ知りてエつつたんだろな? リュミエスはまだ分かる。騎士らしいし武器について知りてエと言いきそうだしな。だが、フェリエラが銃

について知りてエつてのは正直驚きだった。まあ、一応姫様つて言つてたから、異世界の武器の仕組みを理解し、配備したいのかもしんねエつてのかもな。

「んじやあ先ず銃についての簡単な用途の説明を始める。基本的には、遠く離れた敵をぶつ殺すのに使われてた弓より、パワーがあつてもつと遠くから殺すことにある。つてもまあ、昔はそんな技術力が凄かつた訳じや無かつた。出来上がったのは精々当たるのは20mから25m位の火縄銃つーもんだつた」

だが、と俺は区切る。

「この火縄銃つてのは黒色火薬つてのを燃やし、燃やした時に発生する爆発の力を使い、直径10mmくれエの鉄球をぶつばなす機構が使われてた。あまり遠くへは狙えねエが、利点として弓よりは訓練がくそ簡単つーのと、鎧を余裕でぶち抜ける威力があつた」

俺がそこまで言うと、フェリエラが手を挙げてきた。

「弓より訓練が簡単と言つていましたけど、どうして簡単なんですか？」

「簡単に言えば操作性だな。弓も操作性に関しちや簡単な部類だとは思うが、真つ直ぐ標的へ向けて撃ち出すつーのと、矢が命中した時必ず殺せる威力が出るまでには、相  
当の訓練時間が必要になる」

だがな、と俺は区切り、続きの言葉を紡ぐ。

「その点、銃ってのは火薬が弾丸を撃ち出す役目をするもんだから、後は撃ち方と弾の込め方を教えるだけだから訓練時間が相対的に短くなってるって訳だ。しかも、弓矢で攻撃するよりも確殺力は断然上の火力を持っているしな」

「つまり、何処にでもいる一般人ですら銃の撃ち方さえ知ってれば戦力になる、っていう事ですか？」

「まあ、そういう事になるな。最近の銃では難しいかもしれんけどな」

その言葉にフェリエラは首を傾げる。リアルで分からねエ時に首傾げる女つてるもんなんだな。

「どうしてですか？」

「理由はど簡単。正しい狙い方と、姿勢を取らねエとまともに当たらねエからだ」

「そうなんですか？ 昔は簡単って言ってましたけど、そんなに変わってしまったものなんでしょうか？」

「そりゃ昔は正確に狙おうつたって、まともに狙った場所に飛んでかねエからな。基本的には、今の銃ってのは精密射撃が出来るくらいに精度が抜群になっている。それこそ、AR-15は一応、1 km先の目標だって撃ち抜ける」

「そう言い、俺はAR-15を持ちながら説明すると、フェリエラはさらに驚いた表情を見せた。まあ、弾薬的にやあ遠くになりやなる程、威力は7.62 mmに比べると

落ちるがな。

「さて、こつからは銃を撃つ姿勢と、銃の基本操作や弾薬の装填方法等を実演も交えながら解説していく」

そうすると、2人の表情が変わった。そんなに撃てるようになりたいものなのか？  
 まあ、使い方を覚えておいても、この世界では困らんだろうが。

「まず、基本的な射撃姿勢は身体を斜めにし、足を肩幅位に開きなから腰を少し落とす。さらにそこから銃を正面に突き出すように構える。これが基本の立射姿勢だ」

そう言い、実際に俺がAR-15を持ち、例を見せる。他にも膝立て射撃とか匍匐状態での射撃姿勢なども一緒に教え、彼女達に実践させる。

「こんな感じですか？」

「そうだ、その感じだ。だがもう少しだけ足を開いた方が良い。反動を抑えやすくなるからな」

「りこいる」

「あー、銃を撃つた際に発生する反動のことだ。こいつを抑えれなかったら、銃身が反動で上に跳ねるから狙ったとこに飛んでいかなくなっちゃうからだ」

「なるほど。それも考えた上で構えなきゃなんですね。覚えておきます」

彼女らの知識の吸収具合は本当に早いもんだった。乾いたスポンジで水を吸収する

様な勢いつて感じだった。まア、異世界で姫様や騎士なんかしねエといけねエからだろうな。知識をどんどん詰められるつてのは、いくら早くても困るもんでもないもんな。

・まア、俺にもそんな地頭が欲しいもんだと考えたのは、ここだけの話だ。

・その後は、トントン拍子に解説は進んだ。気づけば解説を始めてから、既に3時間が過ぎていた。

・人に物教えるつてのは、案外時間が経つのが早いもんだな。まア、こいつらの理解力がすげエ良いから熱が入るつてもあんだらうけどな。

「以上で、銃の解説と使い方について終了する。俺が最後に言っておくことは、銃つてのは使い方さえ覚えちまえば案外楽に使える様になる。ただ、その分楽に人を殺せるつて事を忘れんな。

・あつさり殺せる命の重さつてのを理解することと、誰に向けて引鉄を引くか、よく考えてから撃つ様にしろよ。そういうのすら考えれなくなつたら、ただの快樂殺人者か、イカレ野郎に簡単に成り下がっちゃうからな」

俺はそう言い、解説を締めくくった。俺が最後に残した言葉は、すっかり伝わつたみてエで、フェリエラは何か考える様子を見せてから頷き、リュミエスは大きな声で「ハイっ、その言葉を忘れぬよう、精進します！」と言つていた。

・案外、人に物教えるつてのは楽しいもんだ。こんな世界じゃなきや教師になるつても、悪くは無エかもな。

## 9話

夢を見た。どんな夢かって言われると、昔の家族。こんな地獄になる前の家族の夢を見た。しかし、夢と言つても俺が遠くからガキだった頃の俺を見ている。そんな夢だった。

『アキト、お前は将来どんな人になりたいんだ？』

『うーんとね、強くて、かっこいいパパみたいな人！』

『そうかそうかー！ パパみたいになりたいのかー！ んじゃ俺ももつとかっこいい所見せれるよう頑張んなきゃな！ アツハツハツハツハツ！』

場面が切り替わる。

『うえーん！ ママアアー！』

『あらあら、そんなに怪我しちやつてまあ。こつちいらつしやい。治してあげるからね？』

『ぐずつ。うん』

『いい子いい子、だから泣き止んで、ね？』

『うん！』

『うふふ、アキトは強い子ねえ』

場面が切り替わる。

『おにいちゃん！』

『ん？ どうしたんだ、ナナカ？』

『んーとね、んーとね、おにいちゃん、いつしよにあそんで！』

『そうかあ、うん、それじゃあお外で遊ぼうか！』

『わーい！ おにいちゃんだいすき！』

『あはは、僕もだよ！』

場面が切り替わる。 1番、見たくなかった場面へ。

『くそつ！ こつちの道はもうダメか、別の道へ急ごう。早くこつちへ来るんだ！』

『ええ、あなた！ さ、急ぎましようか。アキト、ナナカの手を絶対に離さないでね？』

『分かつてるって！ 急ぐぞ、ナナカ！』

『うん。』

おい、やめろ。そつちへ行くんじゃないやねエ！ そつちに行つちまつたら、父さんが

『うわあ！ 何をするんだお前！』

『あなた！』

『くつ、こいつは俺が抑えるからアマンダは早く子供たちを！』

『おにいちゃん、お父さんが!』

『ダメだナナカ! そっちへ行っちゃいけない!』

『ぐあつ!』

『翔一さん!』

ああ、やめろ。もうこれ以上見せるんじやねエ! これ以上

『俺は、もう駄目だ。アマンダ、俺をここへ。がはつ! 置いて、行くんのだ!』

『そんな、父さん!』

『諦めちゃダメだよお父さん!』

『早く、行くんのだ! 俺は、お前達を、殺したくはないんだ!』

『父さん!』

『お父さん!』

『ええ、分かった、わ』

『済まない、アマンダ。子供達を頼んだよ。』

やめろツ! もうこんなのはうんざりなんだよ! もう、こんな事見たくねえって

言ってるだろうが!

『こつちだ、こつちなら奴らはいないよ母さん!』

『ええ、ナナカ、まだ歩けるかな?』

『うん、まだ、大丈夫』

『つ!?』母さん、ナナカ! そこから逃げてえ!』

ああ・ああ・もう、やめてくれよ

『母、さん? ナナカ?』

やめろおおおおおおオオオオオオ!

「つ!?」

そこで、俺は目が覚めた。父さんは奴らに殺され、母さんとナナカは横から突っ込んできた暴走車に跳ねられ、ぐちゃぐちゃになって死んだ所だ。

「クソがつ!」

最悪の目覚めだ。前よりは、この悪夢は見なくなっていた方だった。もうあの事は仕方ねエ事だつて、とつくの昔に割り切っていた筈なんだ。だが、なんで今頃になつてこんな夢を見るんだつていうんだつつの。

「あの、大丈夫ですか?」

「ツ!?!」

いきなりの声で、俺は声のした方へ急いで顔を向ける。そこには、いつ来たかは分からなかったが、心配そうな表情で俺を見ているフェリエラの姿があった。目を覚ましてすぐだったのか、ジェニファーあに持ってきてもらったパジャマを着ていた。まじで、

何時来やがったんだよ。

「あ、あア。何も問題無エよ。ただ、ちよいと夢見が悪かったただけだ」

「そうですか・先程、目が覚めたんですけど、水でも飲もうかなと思つて、リビングに行こうとしたらアキトさんの部屋から、とても苦しそうな唸り声が聞こえて来たので心配で。」

「たまにそういう事があるだけだ。大した事は無エからこれからは。」

「無視すりゃいい、と言おうとしたらフェリエラがいきなり抱きしめてきた。それは、まるで小さな子供をあやす時の様に優しく、ふんわりとしたような抱きしめ方だった。つて、はア!?　なんで、いきなりこいつは抱きしめてくるんだよ!？」

「ん なつ、何しやがんだよいきなり!」

「いえ、なんと言うんでしょうか・何故かこうしなればいけないと思つたんです」

「大丈夫だつて言つたらが!」

「ですけど、アキトさん。あなた、今とても苦しそうな顔をしていたんです」

「無理矢理解こうとするが、何故か体に力が入んねエ。なんでだ?　少なくとも、こいつくらい余裕で振り払えるくらいの力はある筈だつてのによ。」

「もう、苦しまなくて良いんです。もう、悲しまなくて、良いんですよ。」

「っ!？」



俺が心の中を全て吐き出すまで、フェリエラは優しく、まるで母さんの様に抱きしめ続けていた。

何故、その時私はこうしようと思ったのかは分かりません。ですが、アキトさんはその時はとても苦しく、悲しい表情をしていたんです。すると、気づけば私はアキトさんを抱きしめていました。

私も、辛い時や悲しい時はずっと一人で抱え込んでいく性格なので、よく分かります。アキトさんも、私と同じなんだ、と。ずっと一人でこの残酷で、常に死が隣合わせの世界で生きていたんだ、と考えたら胸が苦しくて、とても辛くなって感じたんです。

だから、私はアキトさんを抱きしめたんだと思います。ずっと一人で抱え込んだら、いつか潰れてしまう時が来ます。だったら、私達の命を助けてくれて、更に家に泊めて貰っているんです。きっと、アキトさんの助けが無かったら今頃、私もリユミエスは感染者によって殺されていたかもしれない。だったら、私達も返さなければいけないと思います。今の私には、それ位しかできないんですから。

「ありがとうございます」

「いえいえ、そんなお礼される程の事はしていませんよ」

「それでも、ありがとうございます。本当に、助かった」

「そうですか。私で良ければ、これからも何かあったら教えてくださいね？」

「ああ。そうするよ」

多分、15分位でしょうか。アキトさんは「もう大丈夫だ」と言ったので、私は手を離しました。本当に、大丈夫そうですね。さつきよりも表情が楽になった感じがします。

「それでは、もう行きますね」

「ああ。お休み、フエリエラ」

「はい、お休みなさい」

そう言い、私はアキトさんの部屋から出ました。アキトさんの支えになれるよう、私もこれから頑張らなくちゃ！。そう思いながら、私は部屋に戻りベッドに入りました。あ、お水飲むの忘れた。でも、まあいつか。取り敢えず、明日からアキトさんの為にも、もつと頑張らなくちゃね。

## 10話

「うーむ、そろそろ部品やら食料やらを市場で仕入れてこねエとな」

「フエリエラ達がここへ来てから早くも10日を過ぎた。昨日、恥ずかしい事にフエリエラに慰めて貰つちまつてからは、あいつと顔を合わすのが恥ずかしいがそうは言つてはられん。今は物資の補給は最優先だからだ。」

「アキトさん、まーけつとつて何処にあるんですか？ 良ければ私が行きますよ？」

「んー。まア、それはありがてエけどよ。銃の部品や弾薬とかの種類、まだ分かんねエだろ？」

「うつ。確かに、まだ分かりません。」

「そうやって分かりやすくしよげるフエリエラ。こういう所は、年相応の面見せるんだがな。なんで昨日は、こいつに母性を感じたんだらうな？ 未だに分からねエ。」

「んじやあ、私もアキトさんに着いていきます！」

「ん。分かった、取り敢えずあいつも起こしてからな」

「リュミーの事ですね、分かりました！」

「そう言い、リュミエスを起こしに行ったフエリエラ。さーと、俺も準備しますかね」

取り敢えず手に入れる物は、食料と弾薬、AR-15のパーツに後は掘り出し物があつたら位だろうか。米ドルも持てるだけ持っていかねエとな。

凡そ10分位経った頃に支度を終えたフェリエラとリュミエスが降りてきた。服装は、フェリエラが藍色のカーデイガンを羽織り、下には白一色の無地のTシャツにデニムジーンズを着ている。リュミエスの方はこっちは上着を羽織らずタートルネックセーターとフェリエラと同じくデニムジーンズと言った感じだ。

「お待たせしました、アキトさん」

「待たせて済まない、アキト殿」

「いや、別にこっちもちょうど用意が終わった所だ。」

「んじゃ行くとするか」

「そう言い、俺達は家を出た。」

私・リュミエス・カークライトは姫様・いや、リエラとアキト殿と共に、まーけつとという所に向かっていた。アキト殿曰く、「食料とかそろそろ無くなってきた所だったから、お前らにシアトルの案内のついでに市場マーケットで買い物に行くつもりだ」と言っていた。恥ずかしながら私は、リエラの護衛以外では外を出歩く経験があまり無い。特に、この世界に来てからはアキト殿の家以外の場所へはまだ行ったことが無いのだ。この機会に、このシアトルについて色々調べて行かねば。」

「ここが市場だ」  
マーケット

「うわあ、すごく大きい所ですね！」

「これ程とは」

歩き始めてから凡そ15分程歩くと、そこには大きな道路に所狭しと出店が並んでいた。私が率直に思った事と言えば、王国の店が立ち並ぶ場所と比べると規模が全然違い、大きな市場だ、と感じたのだ。

巨大な建築物の隙間にある道路の幅は10m程の広さで、左右に出店が並んでいる。店一つ一つの大きさはまちまちだが、それでも5、6m程の幅の店が並んでいる。並んでいる店の中には、建築物内部にも広がっている場所もありここならば情報も物資も色々と手に入りそうだと言う印象を、私はその時感じた。

「さア、先ずは俺のお得意さんの店にでも案内するか」

そう言い、アキト殿は私達2人を連れて市場の中に入ってしまった。2分位歩いた場所に、建築物内部からせり出す様になっている店の中に入っていく。どうやら、中に並べてある商品を見た所アキト殿が使っているあざるとらいふるの部品や、あたつちめんとと言っていたものが並んでいる。

「おやつさん、いるかー？」

アキト殿がそう呼ぶと「あいよ」と、少し間を開けて返事が返ってきた。すると、奥

から初老を迎えたばかりの貫禄のある御仁が歩いてきた。外見は、頭頂部が少し交代しているがアキト殿に劣らぬ眼光と、傷だらけの顔をしていて、油污れが付着している。古い古された作業着を着ている。身長は私達所か、アキト殿よりも高く非常に威圧感のある御仁だ。

「よオ、アキト。まだくたばつちやいなようだな」

「たりめーだろが、俺はおやつさんより長くは生きるつもりだつつの」

その言葉にこの御仁は「ふん、ガキが言うようになったもんだ」と、言葉とは裏腹に顔を少し緩ませた表情を浮かべている。どうやらアキト殿との付き合いは長いお方の様だ。

「にしても、おめエさんが女を連れてくるとはな。その子らは一体どうしたんだ？」

「あア、こいつらは10日前程に保護したんだよ。住む場所がねエってジェニファーに泣きつかれてな。しょうがなく家に泊めてんだ」

「あ、えつと、フェリエラ・フォン・アークライドと申します！ アキトさんには色々とお世話になっていきます！」

「私はリュミエス・カーグライトと言う名前です。リエラ共々、アキト殿に世話になっていきます」

「そうか。このガキの相手は疲れるだろうが、まあ頼むわ」

「ハイっ！」

「お任せ下さいー！」

そのお方に私とリエラはそう答える。すると、そのお方は「こんなガキにやあ勿体ね工程いい子達じゃないか」と、仰いました。こう、目の前でリエラ褒められると胸が暖かい雰囲気になりますね！ やはり姫様のお優しいオーラは隠しきれないというか、溢れ出んばかりに優しさが出ていますからねっ！ 当然です！

「取り敢えず、このおやつさんの名前はヴァルター・ジョンストンっつー名前だ。まあ、これからお前らも世話になるからそこん所よろしくな」

「ハイっ！ よろしくお願ひします！」

「よろしくお願ひします！」

「まあ、こちらもよろしく頼む。所で、俺の世話になるって事は」

「ああ、こいつらに合う武器を見繕つて欲しい」

「ええ!? 本当ですか!？」

その言葉に、私はとても驚きました。まさか、この世界の武器を預けてもらえるとは思っても見ませんでしたから。

「私達の銃、ですか」

「ああ、最近銃についての解説もしたし、ある程度は分かってるだろ？ んで、一応護身

ぐらいには使えた方が今のご時世得だしな」

その言葉を聞いて私は納得した。だから私達に銃をつて事なのか。確かに、アキト殿のお陰で銃についてはある程度は理解している。一体、どの様な銃になるだろうか。

「そういう事か。この子らの銃を見繕えば良いんだな？」

「あア、頼んだぞおやつさん」

そう言いヴァルター殿は店の奥へと戻っていく。その間、私達は店の中に展示されている部品やあたつちめんとについてアキト殿に質問していく。

「アキトさん、このあたつちめんとって一体どういのですか？」

「ん？ あア、こいつはバーティカルフォアグリップつーやつだな。簡単に言えば、銃の反動を抑えやすくさせる為のアタッチメントだ」

「アキト殿、これは一体？」

「こいつはTrижиконのACOG 3×20 スコープだな。タイプはTA33のスコープで、解像度がいい性能が良いスコープだ。俺もちよいと前まで使ってた」

アキト殿は相変わらず博識で、私達の質問を苦もなく答えていく。まるで辞書の様に正確な情報を教えてくれた。本当に、この知識は学ばねば。暫くの間はどうせこの世界で戦わねばならないから、知識を蓄えておいて損は無い。そうしてアキト殿に質問をしていくと、選定が終わったらしいヴェルナー殿が戻ってきた。

「おーおやつさん。良さげなのは見つかったか？」

「一応は、手に取ってもらって気に入ったやつで良いだろう。だが、しっかりと代金は払ってもらおうぞ」

「分かつてるって。さすがにそこまではがめつくねエよ。そら、気に入ったのを選んで来いよ」

「そう言われ、私達は目の前に並べられた銃器を一つ一つ手に取って選んでいく。」

「ふむ、私はこの銃にします」

「私は案外気に入ったのが早く見つかり、その銃を選んだ。」

「SIG SAUER P320か。アメリカ軍でも採用された軍用拳銃で、弾薬は9×19パラペラム、40S&amp;W、357SIG、45ACP、380ACPが使用可能だ。どの弾薬を選ぶ？」

「えーとアキト殿が言っていたが、9×19パラペラム弾は基本的な拳銃の弾薬で、威力もある。だけど、どれが良いのかまでは流石に分からない。うーむ、取り敢えずパワーが強い弾薬にするべきか！」

「えーと、それでは45ACPをお願いします！」

「うむ、分かった。調整はこちらで行っておく。そちらの子は決まったか？」

「暫く長い事悩んでいた姫様。しかし、一応決まったらしく、1つの銃を手にとった。」

「それでは、この銃をお願いします」

「FN Five sevenか。小口径の5.7×28弾を使用する拳銃だ。9×19パラベラムと比べ、威力は劣るが反動リコイル、貫徹力が優れている銃だ。初心者でもある程度使いきれれるだろう。これもこちらで調整を行っておこう」

「ありがとうございます！」

そう、姫様はお礼を言い銃をヴェルナー殿へと手渡した。銃の種類だけでなく、使用する弾薬まで知っているとは、この世界では銃器の知識は常識だろうか？ うーむ、あれりかとは、ここまですごい国なのだなあ。

調整はすぐ終わったらしく、銃を梱包するヴェルナー殿。本当にもう調整が終わったのか。普通は武器という物は調整に時間が掛かるものだと思っていたが、ヴェルナー殿の腕が良いのだろうか。

「んじや、俺も選んでもいいかおやつさん」

すると、アキト殿はそう言った。アキト殿は確かAR-15という銃を持っていたはず。なのにどうして他の銃を買うのだろうか？

「アキト殿、確かアキト殿は銃を持っていたのでは？」

「ああ、これはただの気まぐれだ。一応予備兵装サイドアームも欲しかったしついでにな」  
なるほど、予備の武器ということか。アキト殿は用意周到なのだなあ。

「別に構わんが、お前の銃まで調整はしないからな。調整ぐらいお前さんでも出来るだろうからな」

「あア、流石に自分の銃くらいは自分でやとくよ。んじやこれくれ」

「H & amp; P K Mark 23か。では、代金を支払ってもらおうか。今回ので45口径が2つと5, 7mmが1つ・まあ、その子達への初回購入のサービスとして各銃に対応した弾倉を5つづつ。更に弾倉入れを付けたチエストリグを無料でやろう。そいつらを抜かして値段は・こんな物だろう」

「といいヴェルナー殿は計算した値段を書いた紙をアキト殿へと渡す。すぐに確認したアキト殿は「まあ、こんなもんだろうな。これでいいな?」といい、金を渡した。

「・毎度あり。・生きて、また次も来い」

「わかつてるつづーの。じゃあなおやつさん。元気だな」

「そう言い、私達は購入した物を持ち出口を通って店から出ていった。

## 11話

私・フェリエラ・フォン・アークライドはアキトさんに連れられ、ヴェルナーさんのお店から出て次のお店へと移動し始めました。ですが、このマーケットを歩いていたら分かってきたことがあります。

「ようアキト！ そんな美人達連れてどこ行くんだあ？」

「うっせえよラッセル。飲んだくれはさっさと家に帰ったらどうだ？」

「がはははは！ まくだ帰らねえよ、飲み足りねえしな！」

「つたく、相変わらずうるせエ野郎だ」

「おお、アキトじゃないか。どうだい今日はウチの商品買っていかないかい？」

「悪イソファイア婆さん。また次の機会な」

「絶対だからね、忘れんじやないよアキト！」

「ハイハイ」

そう、思っていたよりもアキトさんの交友関係が広い事です。まあ、アキトさんは根はずごくいい人なんだろうなとは感じていましたから、そこまで驚いているっていう訳では無いんですが、隣のリユミエスはとても驚いた表情を浮かべてました。リユ



いですよ。

「私はフェリエラ・フォン・アークライドと申します。これから、ここを利用する機会もあると思いますので、これからよろしくお願いします！」

「私はリュミエス・カーグライトと言う者です！ リエラ共々よろしくお願いします！」  
 「おうともよ！ こんな美人さんとお近付きになれるつてんなら大歓迎つてもんよ！」

「こりやまあご丁寧にもねえ。これ、無料にしたげるから、今後もウチをご鼻屑にねえ」

「あつ、はい。ありがとうございます！」

うわあ、無料で商品を幾つか貰っちゃいました。ありがたいですけど、大丈夫なのかなソフィアさん。売上とかあるのでしょうか。.....

「遠慮は要らないよお嬢ちゃん。これは私からのちよつとした贈り物みたいな物だからねえ」

表情に出っていたのか、ソフィアさんはそう私に言いました。.....私もリュミーの事言えないかな？

「はア、つたくよ。ありがたく貰つとけそれ。こういう時のソフィア婆さんは頑固だからな」

「減らず口は相変わらずだねえ.....まあ、そこがアキトラしいつてもんだけどねえ」

「あはは」

うーん、これにはどう答えれば良いんだろね。こういう時の対処法は知らないから、苦笑いしかできませんね。私がそう思っていた時でした。

ウウ——ッ！

いきなり、大きな音が聞こえ始めたのです。なんですかこれ!? 一体何の合図なんですか!? そう私が混乱していると、大きな音に続いて人の声が聞こえてきました。

感染者襲撃警報! 感染者襲撃警報! 西検問所より大量の感染者の襲来が報告され

ました! この警報を聞いた回収者は、フリーやギルド所属関係なく西検問所への防衛

を行ってください! 時間はあまり残されておりません! 直ちに西検問所へと向

かってください! 住民の方は、シエルターへの退避をお願いします! 繰り返します

「おいおいまじかよ! こりゃ飲んでる場合じゃねえ!」

「クソツタレが。フェリエラ、リュミエスはシエルターに行ってください」

「アキトさん(殿)!?」

「頼むからシエルターへと行ってくれ。私達も戦いますって言うんじゃないぞ。こういうのは、慣れてる俺達に任せておけ」

確かに、感染者を相手取るにはリュミエスならともかく、私だと足でまといになる

だけ分かつてはいます。けれどせめてこれだけは、言わないといけません。

「絶対、死なないでください！」

「おう、まだ教え足りぬエ事がまだまだあるしな」

「そう言い、私達はシエルターへ。アキトさんは西検問所へと向かつていきます。どうか、アキトさん達に神の御加護を。」

「状況はどうなってるんだウエンバース！」

装備を整え、西検問所へと辿り着いた俺はこの守りを務めているウエンバースに状況の説明を求めた。ウエンバースの様子はかなり取り乱していて、落ち着きが無い様子だ。というか、ウエンバースでめエ一応守衛とは言えアメリカ軍人だろうがよ。なんで俺より落ち着きが無エんだよ。

「ア、アキトじやねえかよ。奴らは後10分もしねえウチに来る感じらしい。というか、幾ら回収者スカベンジャーやつてるとはいえよ、なんでそんなに落ち着いてられんだよ!」

「はアー、てめエは一応軍人だろうになんで俺より落ち着きが無エのかこつちが知りたいつつーの。正直に言えば慣れだよ慣れ」

「慣れって。で、でも仕方ねえだろお!? 俺軍人つつつても殲滅作戦後の徴兵で兵士になっただけで、まだ現場にすら訪れた事無いんだよ!」

「あアー。そういう事かOK分かったわ」

「スカベンジャー そう言い俺は周囲を見渡す。見慣れた顔が随分と増えてきた。多分、シアトルにいる回収者は大体揃ってる感じだろう。まア、セーフゾーン 安全地帯をこれ以上減らす訳にもいかねエし、拠点もあるだろうから死力を尽くしてでも守るのだろう。俺も、負けてらんねエよな。」

「セーフテイ そう思い、俺はバリケードとなってる箇所へと移動し、AR-15とベネリM3の安全装置を外し奴らを待ち構える。Ready to fight さア、来てみやがれよ感染者共。俺達はもう臨戦態勢なんだからよオ」

## 12話

「ファイア起爆！」

ズガバカドゴントッ！

設置してあったM13クレイモア地雷を起爆する。それにより、感染者の先頭集団はあつという間に動けなくなり、鴨撃ちよろしく弾丸がぶち込まれる。

「ハッハア！ こいつはいい的だぜ！」

「オラオラオラアぶつ殺してやるよf O c k y o u！」

「死に腐れクソツタレ共がよ！」

各々暴言を吐きながら感染者共をぶつ殺していく。俺も負けじとAR—15の引鉄を引き続ける。今回は消音器サプレッサーを付けていないため、銃声を周囲に響かせながら撃ち殺していく。こんなの、目をつぶつても中つちまう位クソ簡単だな。

バンバンバンツ！ と、引鉄を引き感染者を殺していく。全て頭部目掛けて弾丸を撃ち込む。そしたらすぐに脳漿のスープを撒き散らしながら奴らはぶつ倒れていく。だが、一向に数が減らない。まるでゲームでよくある無限湧きの敵を倒していく気分になつていく。て言うか、まじで数多すぎだつーの！ こんなのあつという間に弾薬が

尽きちまうだろうが！

そう思いながら撃ち続けていると、別の箇所からいきなり悲鳴が聞こえてきた。

体何が起きやがったんだ？

「変異体ミュータントが現れたぞー！」

「ッ?！」

はア!? こんな所に変異体ミュータントだと!? おかしいだろ、変異体ミュータントつーのは今の所ニユー

ヨーク周辺の最初期感染地帯でしか確認されていないはずだったじゃねエのかよ!!

「何型が現れたんだア!？」

「β型だ!」

マジかよ・・・よりもよゆうてβ型だと!? ここにある武装じゃあ装甲をぶち抜け無エ

じゃねエかクソツタレが・・・

「誰か、あのそびえ立つクソの様なボケカスぶつ殺せる武器持つてねえか!？」

「あのクソツタレをぶつ殺すってなるとカール・グスタフかSMAWが必要だ! そんな

なの俺らみてえな回収者が持つてるわけねえだろうが!」

「クソツタレが!」

クソツ! こんなところじゃ死んでも死にきれねエぞ・・・それに、フェリあエラい達らに約束

したじゃねエか。『絶対に守り抜いて、生きて帰ってくる』つて。だから、こんなところ

じゃ終われねエ！

「殺るしか無エぞてめえら！ 手持ちの武装で最大火力ぶち込むしかねエ！」

俺は周囲の回収者達スカベンジャーにそう叫び、ベネリM3の弾薬を散弾バウクシヨットから一粒弾スラッグに装填し直

す。

「そうだな、確かに出来るだけの事をやるしかねえよな」

「だークソツタレが！ しょうがねえ、やつたろうじゃねえかこの野郎！」

「分の悪い賭けは嫌いじゃない。ここは1つ、俺らの命を賭けるベットしようじゃあないか

！」

そう口々に言い放つ回収者達スカベンジャー。腹は括つた。後はやれるだけやるしかねエ！

「来いよ、このドグサレ野郎がア——！」

「アキトさん——」

外からは、何度も何かが発火する様な轟音が聞こえてくる。きつと、アキトさん達は今苦戦しているのでしょうか。とても、心配です。アキトさんはああ言っていましたけど、どうしてもこの考えが嫌でも浮かんできます。『感染者に殺されてしまって、きつとアキトさんは帰ってこない』。ずっとその不安が胸に残り続けています。

「リエラ、心配なのは分かりませす。ですが、今の私達には出来ることはありません。」

リユミーがそう悔しそうに口を開く。分かつています。いくら感染者の事を知ろうとも、感染者に対抗する為の武器を持つたとしても変わることは無く、私はただの世間知らずの姫で、足でまといにしかなれないと。

ですが、無駄だとしても何か出来る事があつたのではどうしても考えてしまいません？

「リエラ、何か聞こえませんか？」

「そう考えていると、リユミーが突然そう言いシエルターの出口を指さしました。一体、何が聞こえたのかな？ そう思いながらも、外へと耳を傾ける。」

「ヴオアアアア！」

「なんでしょうか、何か叫ぶ様な声が小さいですけど聞こえてきました。ですが、何かその声は生きている人とは思えないおどろおどろしい声でした。そう思っていると、いきなりシエルターの扉から何かを強く叩きつけるような音が聞こえてきました。」

「ゴオン！ ドゴドゴン！ ダガン！」

「次第にその音が強くなるにつれて、なんとシエルターの扉が歪み始めてきたのです！」

「まさか、この叩いている人って、もしかして」

「姫様！ 私の後ろへと下がってください！」

「リユミーが切羽詰まった声で私にそう言いました。シエルターの扉は、もうかなり歪

んできていて、すぐにでも破られてしまいそうになっています。すると、私達と同じ様にシエルターへと避難してきた人達が怯え始めました。

「嘘だろ!?! 感染者は回収者スカベンジャーの連中が食い止めてるんじゃないやなかったのか!?!」

「嫌だよお! まだ死にたくない!」

「クソツタレが! 回収者達スカベンジャーは一体何やつてるんだよ! 奴らに侵入されてんじゃないやね

えか!」

「もしかして、もう全滅してしまったんじゃない?」

その言葉に、私はとても恐怖を覚えました。嘘、アキトさん達はもう、死んで

そう思っていると、ついに感染者によってシエルターの扉は破壊されました! 一瞬

でシエルター内は阿鼻叫喚の様相を見せ、逃げ出そうとし始める人や、生きる事を諦めてしまったのか呆然とする人がいたり、他人を犠牲にしても生き残ろうとする人等が

現れ始めました。

「もう駄目なんだあ! 俺達はこの奴らに食い殺されちゃうんだよお!」

「母さん」

「クソツ! 俺はまだ死にたかねえんだよ! 死ぬならためえらが死ねばいい!」

色々な言葉や暴言が飛び交う中、リュミーは私へと耳打ちしました。

「姫様、ここは私が隙を作ります。そこから姫様は避難してください!」

「そんな!? 駄目よリユミー!」

「私の使命は姫様・リエラを守る事ですから。例えその途中で死のうとも、リエラを守ることが出来るのでしたら本望です」

駄目ツ! 死んでは駄目なのよリユミー! いくら私が生き残る為でも、アキトさんだけじゃなく貴方まで死んじやったら、私は生きていけないよ。

・私に力があれば、リユミーを助ける力があれば、アキトさんを助けられる力があればツ!

そんな風に思っていると、感染者がついに此方へと襲いかかつて来ました。リユミーは収納魔術により格納された大剣クレイモアを取り出し、感染者へと刃を向けます。

「姫様は絶対に殺させやしません! 道を開けるおおおおおおお!」

そう言い、リユミーは感染者の中へ突っ込んで行き、大剣クレイモアを振り回します。振り回すと、刃によって一刀両断された感染者は下半身を失い、倒れます。そこに追撃の刃が頭部へ向けて振り下ろされ、ザクらの様に、感染者達は頭部を弾け飛ばされていきます。

段々と数が減り、残り数体となった所でシエルターの入口からまた新たな増援が現れます。増援の中には、腕部が肥大化した感染者がいます。あれって、もしかしてアキトさんが言っていた変異体!ミュータント!

「リユミー、危ない!」

その変異体はリユミーを見た瞬間、一気に距離を詰めて、その肥大化した腕部を振り下ろそうとします。しかし、リユミーは他の感染者の相手をしており、その変異体の攻撃に気付いていません。

「なっ!?!」

リユミーが反応できたのは、その肥大化した腕部を振り下ろす瞬間。もう、避ける事は出来ない距離でした。

「やめてええええええええっ!」

もう、私はそう叫ぶしか出来ませんでした。腕部がリユミーを潰そうとした瞬間、いきなり視界が真っ白へと変わっていきました。一体、何が起きたの？ リユミーはどうなってしまったの？

力を汝は欲するか？

いきなり、その言葉が頭の中に響きました。

「っ?!? 誰ですか!?! 一体何が!」

汝は力を求めるかと聞いている

力?

そうだ。力を欲するか？ 汝が守りたい者を守る力が

さつきよりもはつきりと、その言葉が私の頭の中に響き、私に問いかけて来ました。リユミーや、アキトさんを守る力。そんなの、欲しいに決まってるでしょう！

ならば、そのもの達を守る力を与えよう。代償を受け入れる覚悟があるのならば

それでも、皆を守るのなら代償の1つや2つ位受け入れてみせます！

ならば与えよう。さあ、汝が望む力を振るうがいい！

その言葉の後、私の体の中に何か暖かい物が流れ込んでくる感覚を感じながら、私は意識を失いました。

私・リユミエス・カークライトは後悔していた。目の前に現れた変異体ミュータントの攻撃は、普段だったら避ける事は楽勝で出来ていただろう。しかし、今回は他の感染者に気を取られすぎた油断から来たミスである。そこがどうしても、情けなく感じる。

リエラを守って死ぬるのならば本望。しかし、こんな最後になってしまうとは。本

当に情けない。ですが、リエラ。どうかこの先の無事を祈ります。

そう私は覚悟を決め、目を閉じた。次の瞬間には、奴の攻撃で私は死んでいる。筈だった。いつまで経つても、訪れる事の無い衝撃。何故だと思ひ、私は目を開く。するとそこには、有り得ない状況が目の前に広がっていた。

「リエラ!？」

そう、リエラが変異体ミュータントの攻撃を両手で防いでいたのである。しかも、何も身を守る物を付けていない状態。

「へ地の精よ、我が腕かいなに全てを打ち倒さん力をー」

リエラがそう言うと、目の前で更に攻撃を加えようとしていた変異体ミュータントが、シエルターの外へと勢い良く吹き飛ばされて行ったのだ!

「姫様?」

「大丈夫、後は全部私に任せて?」

そう言うと、リエラはシエルターの外へと向かっていった。リエラ、一体何があったのです?

## 13話

「くたばれ、クソツタレの化け物が！」

そう言い、俺は変異体へと一粒弾をまた撃ち込んでいく。すぐに弾切れになるため、

こまめに装填しねエといけない。排莢口へと直接弾を込め、装填口へと2発づつ

一粒弾を縦に握り、装填する。

装填が終わったら即射撃に移る。クソツ！ もう残り少ないつっのに、まだピン

ピンしてやがる。周囲には俺と同じ様に変異体へと攻撃していた回収者がいるが、最初

に比べたら数が減ってきている。

何故と言われれば簡単。感染者のクソツタレ共に殺される奴や、弾薬補給の為に1度撤退している奴、重症を負い戦線離脱している奴等が出てき始めているからだ。

「っ！ 危ねエじゃねエかよこの野郎！」

俺はそう吐き捨てながら、振り下ろされた腕の攻撃を避ける。一撃でも貰えば即死か、運が良くても全身が粉碎骨折になっちまう。実際にそれで死んだ奴や、悶え苦しみながらぶっ倒れている奴もいる。絶対にそんなのはごめんだがな。

「Mother fucker! 本当にクソツタレな装甲しやがって！ 何食えばそ

んな体になるんだってんだよ！」

「クソ・痛てえ・助けてくれ・誰か！」

「クソツ！ 誰か衛生兵呼んで来いよ！ 間に合わなくなる奴もいるんだぞ！」

もう阿鼻叫喚だ。まさに地獄って感じに、今なっている。ウエンバースの野郎、遅すぎやしねエか？ 東検問所にある戦車を呼びに行くって言うてから、もう15分位経ってんだが。

「お、おいおいおいおい！ なんがおかしいぞ！」

誰かがそう叫ぶ。その声で俺も異常に気づく。なんだコイツ、さつきよりも堅くなつてきてねエか！

そう、先程までは俺が撃った一粒弾スラグで傷を付けることは出来ていた。(自然治癒で傷跡自体は消えていったが)だが、今では撃つたとしても奴の体に当たった弾丸は跳弾する程の硬さへと変貌していた。

「もしかして、一撃でぶつ殺せなきやどんどん硬くなって攻撃が効かなくなってるってのか!？」

誰かがその考えに至り、嘆くようにしてその言葉が吐き出された。今までは一撃でぶつ殺せていたから、この特性までは調べられていなかったつー事かよ!? 確かに、

死なない程度に手加減して、調査するなんざ自殺行為だ。だからこそこの特性は明らかになつてなかつたつて事なのか。

「っ!? しまった!」

俺は呆然としていたせいで、変異体ミュータントの攻撃に気づかず、その一撃を喰らつた。咄嗟に銃を間に挟み、威力を抑えようとしたのが良かったのか、一撃で死ぬ事は無かつた。

一撃で死ねなかつたから、苦しむ羽目になつたとも言つうが。

ベキゴキグシヤツ!

奴の一撃を喰らつた瞬間、俺の体の内部からこんな音がした。そう、全身の骨が一気に砕けた音だ。

「グッ!? ゴツ、アガアアアアツ!?」

痛てエー! 痛てエー!? イテエエエエ!? なんだ、この痛みツ。その瞬間、体ん中がグチャグチャにシエイクされたみてエな、地獄の様な激痛が俺の体を襲う。

何故だかは分からねエが、気絶する事が出来なかつた。あまりのシヨックで、強制的に意識がおかしくなっているのかもしれないねエ。畜生!? なんで、なんで、こんな痛みを俺が受けなくつちやあいけねエんだよ!? 俺が何したつてんだよ。

「グエ・ゲ、ガハア!」

口からとんでもねエ量の血液が溢れ出す。まるでマールライオンの様に、一気に大量の

血が俺の体から流れ出す。すると、段々と意識が遠のいて来た。血液が一気に無くなったことによるショックだろうか。それで俺は、「ああ、これが死ぬって事か」と、漠然と理解した。クソツ、死にたく、ねエなあ。フェリエラ、リュミエスすまねエ。約束、守れそうにないわ。

「へ癒しの精よ、今この場に於いて、この者に命の加護を！」

何処からか、聞いた事がある声聞こえる。その言葉が聞こえてきてから、スツと俺の体は、何か失った物が、急速に俺の体へと返ってくる様な感覚に包まれた。

「一体、何が？」

「もう大丈夫ですよアキトさん。後は私に任せて、ゆっくり休んでください」

その言葉が聞こえてすぐ、俺の意識は眠る様に無くなっていった。

——10分前、シエルター前にて。

「ヴェアアアアアアアアア!!!」

目の前の変異体ミュータントが私に向かって突っ込んでくる。本来だったら受け止めるなんて絶対に有り得ない威力を持っている。しかし、私はその一撃を軽々と受け止めることが出来た。

「へ炎の精よ、今此処に、全てを灰塵と帰す炎を！」

私のその言葉によって、目の前の変異体ミュータントはあらゆる物を焼き尽くす様な炎に包まれ

る。・・・そう、私は今魔術を使い攻撃しているのです。しかし、本来ならば私は魔術を一度も使った事が無いのに関わらず魔術を行使しました。

何故魔術がいきなり使える様になったのか、原因は分かっています。あの時、頭の中で誰かの声が聞こえてきたけど、その時に『力を欲するか』と言われていたのです。だから、その求めた力が魔術を行使出来る様にさせたんだと思います。

「ヴォアアアアアア！」

炎に身を焼かれながら、変異体は私に向けて走ってきました。それに私は、足に付けていたホルスターからFN Five sevenを引き抜き、照準を頭へと向け、引鉄を引きました。何故銃を使うかと言うと、まだ魔術の感覚を上手く掴めていませんし、魔術を行使するにも慣れていないからか、次の魔術行使までに少しの間隔が生じるからです。

引鉄を引いたことにより、銃身から5・7×28弾が撃ち出され、変異体の頭部へと一直線に飛んでいきます。しかし、飛んできた銃弾を変異体はとも容易く肥大化した腕で受け止められました。放つなら、今！

「風の精よ、あらゆる物を裁断する風の刃を！」

銃弾を受け止められる事は、予想外ではあったけれどあくまで牽制と気を引く為の銃撃。本命は風の精による風魔術での攻撃です！

放たれた風魔術は、変異体<sup>ミュータント</sup>の体をまるで熱したバターナイフでバターを切るかのよう  
にサクッと切斷した。ですけど、一撃で終わりません。その攻撃は隙を与えぬ2段構え  
の風の攻撃なんですから！

「氷の精よ、彼の者に全てが凍てつく吹雪を！」

足が止まったところで、氷魔術による凍結攻撃。これにより、さっきの攻撃で地面に  
倒れた変異体<sup>ミュータント</sup>は氷によって地面に縫い付けられる。しかし変異体<sup>ミュータント</sup>は私に攻撃しようと  
残された体でもがき、氷を砕こうとします。ですが、そうはいきません！

「これで、終わりです！」

変異体<sup>ミュータント</sup>へと近づき、至近距離でFN Five sevenを構え、頭部へと引鉄を引  
く。

パンパンガンツッ！

引鉄を何度も引き、変異体<sup>ミュータント</sup>へと射撃する。今度は腕も使わせない様にした状況なの  
で、抵抗できず銃弾を何発も頭部へ喰らった。頭蓋骨を貫通した弾丸により脳組織は徹  
底的に破壊され、変異体<sup>ミュータント</sup>はその動きを止めた。よし、後はアキトさんの所へ急がなく  
ては。そう思い、アキトさんがいる西検問所へと足を向ける。すると後ろでこの戦いを  
見ていたりユミーから話しかけられました。

「姫様、これは、一体？」

「うーんとね、説明するとなるとちよつと時間が掛かっちゃうかな？ 悪いけど、説明は後ね」

「姫様！ 一体どちらへ!？」

「アキトさんの所へ行つてきます。だから大丈夫だよりユミー。貴方は、ここで一般人の方々を守つていてもらえるかな？」

「姫様 分かり、ました。こちらは任せてください」

「ごめんね、リュミー。じゃあ任せましたよ！」

「はい。ご武運を！」

「うん!。〈風の精よ、この体に風のような速さを!〉」

私がそう魔術を唱えると、風が私の体を包み込み、前へと勢いよく押し出す!。助けて頂いた恩、今束、破っちゃいましたけど、今の私の力なら手助け出来るはず。返しに行きます!

約

## 14話

「もう、貴方には誰も傷つけさせません！」

「目の前にいる変異体へと、私は啖呵を切る。アキトさんだけじゃなく、他の回収者さんにも大きな怪我や、死者が出ている。出来るだけ早く倒して、負傷している人達を治療しないといけませんね！」

「誰だか知らねえが、よせ嬢ちゃん！ そいつの相手はやめるんだ！」

「グオオオオオオオ！」

回収者の1人がそう言うと同時に、変異体は雄叫びをあげながら私へと突っ込んでくる。

「鉄の精よ、我が肉体に決して砕けぬ剛毅なる魂を！」

私とその魔術を唱えると、体全体をオーラが覆う様に発生する。変異体が攻撃を当ててきたが、衝撃だけで、私の体には怪我ひとつない状態だ。

「これでも喰らいなさい！」

そう言い、私はFN Fivesevenを抜き放ち引鉄を引いた。が、変異体の体には命中したものの、銃弾が弾かれてしまった！  
嘘、なんて硬さなの!?



嫌になっちゃうくらいのタフだなあこの変異体。ミュータント 私の魔力容量はそんなに多くないし、

そろそろ撃てなくなるかもしれないのに。

そう考えていると、後方から何やら「キュラキュラキュラ」と金属つばい音が聞こえて来た。スカベンジャー 一体こんな状況で何が来るの!? その様子に気づいた回収者は、音のする方へ指を向けて何やら叫び始めた。

「おいあれつて・Mーエイブラムスじゃねえか! つーことはウエンバースの野郎、やつと戦車をこつちへ持ってこれたのか!」

「やつとこさ希望が見えてきたじゃねえか。」

「よーし! そのでけえ主砲で、あのクソツタレの変異体ミュータントをぶち抜いちまえ!」

後ろからやってきた物を見ると、アキトさんアキトから聞いた事がある戦車というものがやってきた。その車輛の上には見た事がある顔・数日前、こちらの家に挨拶に来たアキトさんの知り合いであるウエンバースさんウエンバースだった。確か、あの人はここの守備兵さんだったわけね。

「おーい! 遅くなっちゃったが、只今到着だ! っつて、フェリエラちゃんじゃねえか

!?! 確か、アキトの野郎はシエルターに避難したつつたはずじゃあ無いかよ!?!」

「すみませんけど、そのお話は後でお願いします! 今は目の前の変異体ミュータントをなんとかし

ましよう!」

「お・おう！ 了解したぜリエラちゃん！ よし、砲手。今すぐあのクソツタレに

装填・付翼安定徹甲弾

APFSDS弾をぶち込んでやれ！」

Roger that Open fire

「了解、主砲発射！」

すると、戦車の主砲という物から轟音をたて、何かが撃ち出された。撃ち出されたのは確か砲弾というものだっけ。あれが命中すればひとたまりもない筈。

ガゴオオオオオン!!!

けたたましい音が、周囲に撒き散らされる。この轟音は変異体に砲弾が命中した音らしいけど、なんて硬さなのあいつ。こんな音になる位に硬くなつてたの!?

煙が晴れるとそこには、命中した箇所が大きく抉られた変異体が立っていた。嘘、

今ので死んでないの!?

What the rock

「なんだこりやあ!?! なんで今ので生きてやがるんだ!?!」

『クソツタレが!! 化け物が、どんなドーピングすりやあそんな鋼みてえな体になるっ

てんだよ!?!』

ウエンバースさんと、砲手の人の驚いた声が聞こえてくる。でも、驚いてる場合じゃない! 再生はしているけども、傷口が大きすぎるのか速度はかばりおそくなっています。今の内に、そこに爆発系の魔術を叩き込めばいけるかもしれない! そう思い、私は詠唱を始めながら変異体へと駆け出した!

「炎の精よ、我が腕にあらゆる物を爆砕せしめる爆炎を！」

その言葉を詠唱し終わると同時に、変異体ミュータントの傷口に右腕をぶつける。すると、詠唱された魔術が起動し、高火力の爆発を発生させた！

ドガアアアアアン!!!

その轟音と共に、傷口を起点に変異体ミュータントは爆発四散！ビチャバチャと周囲に肉片や、内蔵等を飛び散らせながら、残された下半身が倒れていく。間違はなく、今度は殺せたのだらう。だけど、一瞬でそこまでバラバラになる威力だ。当然だけど、私は無傷で勝ったという訳ではありません。

「ぐッ、はぁ。」

爆炎を真正面から受けたから、体の前半分には所々深めの火傷を負い、右腕は爆発に一番近い箇所だったからか肘から先が消し飛んでいた。一応、魔術で身を守っていたとはいってもこれ程の威力だなんて、思わなかった。痛すぎるよ。

「お、おいお嬢ちゃん!? 大丈夫かよ!?!」

「うへえ、これは、酷い傷じゃねえかよ。」

「おいおいリエラちゃん!? いくらなんでも無茶すぎだぜその攻撃は!」

私の状態を見たウエンバースさんや回収者タスクマスターさん達が私に駆け寄りながらそう言う。

確かに、無茶しすぎましたねこれは。リュミーにまた心配かけちゃうなあ、だけ。

「大・丈夫、です。これ、なら、なんとか。へ癒しの精よ、どうか我が肉体に全てを治す癒しの加護を！」

私がそう唱えると、治癒魔術により傷が回復していく。火傷は治り、腕も元通りになりました。すると、周囲の人達が驚いた表情を見せ、口々に喋りました。

「なんだそれ!? 一体、何が起きやがったんだ!?!」

「おいおい、俺は夢でも見てたのか!?!」

「はあ!?!」 エラちゃん、一体何したつて言うんだよ!?! さっきの怪我、どう考えたつてあつちゅー間に治るなんておかしすぎるでしょ!?!」

「あ、あははは。これに関しては、またあとにお願いします。今は、怪我人の治療をしなきやですから」

そう言い、私は人混みをかき分けて怪我人の元へ急ぐ。さあ、今ある魔力で出来るだけ助けなきや!

俺が気絶してからどん位時間が経ったんだろうか。そこら辺は分からんが、俺は気絶から目を覚ました。どうやら、外でぶつ倒れていたとこだと思っていたが、室内にいてみてエだ。という事は、あのクソツタレのβ型変異体ミュータドはぶつ殺せた様子らしい。

「あア・クソツタレ、体がだりイっつのクソが」

そうボヤキ、俺はベットから起き上がる。見た感じだここは病室のような感じだ。多分、ぶつ倒れてから俺を病院まで連れて行ってくれたのだろう。誰だか分からねエが、ありがたい。後で礼くらいは言わねエとな。そういえば、なんで俺は生きてんだア? あの傷はどう考えたって間に合わねエもんだった筈だが。

『もう大丈夫ですよアキトさん。後は私に。』

ツ!? そういや、なんでフェリエラがあの場所にいやがったんだ!? あん時シエルターからは出るんじゃないやねエつつたはずだ。あいつはまだ短い付き合ひではあるが、基本的には約束を破る様な奴じゃねエ。だが、何故あいつはこつちへ来たんだ。俺が思考の海へと潜り始めた時、病室のドアからノックが聞こえてくる。誰だ一体

? もしかしてフェリエラか? だとしたら色々と問い詰めねエとな。

「あア、入っても問題ねエぞー」

『では、失礼します』

そう言い、ドアが開く。そこにはリユミエスが立っていた。なんでこいつが来たんだ? まあいい、こいつでも何かあったくらいは分かるだろ。っていうか、こいつは護衛だつて言っていた筈だ。護衛対象をわざわざ危険地域へと行かせる筈がねエ。だとしたら、何か知っているはずだし、聞いてみるとするか。

「あの、先程意識が戻ったと聞き、お見舞いに来ました。体調は大丈夫ですか?」

「特には問題ねえな。リュミエス、お前に質問がある」

「……なんでしようか」

「お前の護衛対象・フェリエラについてだ。洗いざらい、何があつたか言つて貰えるか？ つーか、フェリエラは何処にいったア？」

俺にその言葉に、リュミエスは答えづらそうにしながらも、俺の質問に答える。

「姫様はえつと、実は昏睡状態でまだ意識を取り戻していません」  
「はア!？」

## 15話

この前の感染者の襲撃から2日経った頃、俺はフェリエラが眠っている病室へと訪れていた。何やら、リュミエスから聞いた話によると、β型変異体<sup>ミュータント</sup>を倒した後、フェリエラは精霊魔術とやらを使って怪我人の治療に奔走していたらしい。

んで、生き残っている全員を治療した後、突然ばたりと倒れたらしく、そこから意識が戻っていない。医師に診断結果を聞いた所、「身体に異常は見られない。ただし、意識不明になっている原因までは分からない。体は全く異常が無いのに、なんで目覚めないか」が謎だ。もしかしたら心因的な問題があるのかもしれない」と言っていた。

「やっぱり、まだ目覚めねエか」

俺は病室へとつき、ベットで眠っているフェリエラを見てそう言った。医者は心因的な問題って言ってたが、そんなんで本当に意識が戻ってこないなんてありえんのか？正直そういうのは詳しくはねエからわからん。

まあ、だからって言っただけでここにいる訳にはいけねエ。一応顔は見たので俺は病室を出ていく。すると、病室を出た所、ちょうどリュミエスが来ている所に出くわした。「ん、お前も来たのか」

「アキト殿か。ああ、それで、やはりまだ姫様は目覚めていないのか？」

「ああ、依然変わらず御伽噺に出てくる眠り姫って所だ。目覚めたら原因を問いたたださねエとな」

俺の言葉に「ああ、確かに聞かないとな」とリュミエスが言った。やっばこいつ、以前より元氣つつーか、覇氣が無エ。まあ、姫様第1つてやつだしな、当然つちやあ当然か。

「んじゃ、俺はいつもの仕事に行ってくる。フェリエラの事は任せたぞ」

「ああ、任された。分かっていとは思うが、氣を付けてな」

「死ぬ氣は無エよ。まだフェリエラに礼も言つてねエからな」

俺がそう言うと、リュミエスが微笑みながら、「そうだな、では、絶対に生きて帰つてこい」と俺に言ってきた。言われねエでも無エ。俺はこんな所で死んでいらねエし、やりてエ事も一応まだあるからよ。

さてと、まずは仕事前に市場マーケットに行くか。装備や弾薬はこの前のでほぼ使い切つちまつた。それに、新たな武器も必要だからな。考えをまとめた俺は、病院を出て、市場マーケットへと向かうのであった。

暗い・暗いよ。何処まで歩いて、辺りの様子は変わることは無い。私ことフェリエ

ラは、終わりの見えない暗闇を彷徨っていた。

何故私がここにいるのか・原因は分かっている。私は治療で魔力容量を使い切り、更に生命力・俗に私達の世界ではオドと言われるものを使って精霊魔術を行使したからだ。

生命力を魔術で使ってしまうとどうなるか・当たり前だが、私の意識の維持が出来なくなる。体の動力として使っている生命力を他の所に回してしまい、尚且つそれをかなりの量を使ってしまうえば体は動かなくなる。

しかし、生命力は時間が経てば回復する。回復する為には体を休め、それに集中しなければいけない。つまり体は今の状態を表すなら休眠状態と言うことになる。

あの時治療で魔術を行使する事には、正直言っちゃえば後悔はしていない。それが私ができるべき事だと思っただし、私がやれば救える命があるんだから、やらなきゃって思ってた。

でも、今この暗闇の中でこうしていると、正直に言えばすごい心細い。ずうーつと回復する迄このままだし、誰かと会話するなんて出来やしない。本当に、リュミエスやアキトさんには迷惑や心配をかけちゃってるよね。

早く戻りたいよ・ここは孤独だ。リュミエス、ウエンバーズさん、ジェニファアーさん、市場のみんな・そして、アキトさん・皆に、会いたいよ。

だけど、今の私には出来ることは無い。こうして体を休眠させ、生命力の回復に努め

るしかない。絶対に帰ってくるから、帰ってきたら、これらの事を話さなきゃ。だから、こんな所でへこたれていられない。皆がきつと待ってるから、私も頑張らないとね。

マーケット

市場に着いた俺は、まず向かったのはヴァルターの爺さんのガンシヨップだ。前回の襲撃でベネリM3は盾代わりに使っちゃまったからぶつ壊れて使えない。ジェニファーには一応謝つたが、「命があるなら儲けもの。あんたこうしてられるのが大事だから、別に大丈夫よ?」と言われた。

とにかく、銃がもう一丁必要だ。だが、また散弾銃ショットガンを買うつもりではない。買うとしたら、30口径のライフルだ。ストップピングパワーが、今使ってるAR-15じゃあ足りねエ。前回の戦いでそれを痛感した。だからこそ30口径のライフルを買うことに決めた。ついでに、AR-15の代わりに使える銃も買うつもりだ。一応ぶつ壊れた時の予備としてだが。

「おーい、爺さん。生きてつかア?」

「ふん、てめエが生きてる限り、俺ア死なねえぞ」

「そうかい。ふん、新しい銃が必要だ。商品を見せてもらってもいいか?」

俺がそう言うのと、爺さんは「着いてきな」と言う。ここヴァルター銃砲店では、基本的には地下に銃器を置いている。俺は爺さん僕が後に着いていき、店の奥にある階段

を下つていく。

そして、階段を降りた先には分厚い鉄扉がある。かなりの厚さだから、そうやすやすとぶち破る事は出来ないだろう。その厚い扉を爺さんは軽々開ける。相変わらずだが、本当に70の爺さんかよ。

「さて、どれが欲しい。てめエが好いたもんを持つてけ。代金は貰うがな」

「そう言われたので、俺は銃が置かれているラックへと目を向ける。ロシア、ドイツ、スイス、アメリカ、色々の国々の小銃が置かれている。セミオート、フルオート、ボルトアクション、レバーアクション、良くもまあここまでの種類の銃をこのご時世集められたもんだ。案外こうなる前から持つてたのもあんだらうけど。」

さて、俺が欲しいと思つてゐる銃は、30口径のセミオート、もしくはフルオートの小銃だ。そして、さらにつけ加えるとすれば予備の部品が楽に手に入る銃つて所か。この条件だと、1番いいのはロシアで最も有名な小銃であるAKシリーズだ。しかし、精度という所に関しちやあちよつとあれだ。

そうなるとAR—15とかのM16やM4シリーズ（アサメリカ 御用達）の系列になるが、俺が欲しいのは30口径だ。一応7.62mm弾頭が撃てる。300 AAC Blackoutと言う弾丸があるが、ガス圧やらの関係で銃身や機関部が爆発してしまう危険性があるの  
でこれは却下。他にはSR—25系列の30口径のマークスマンライフルが有るが、こ

いつらは銃自体値が張るし、こまめにメンテナンスがいるので除外だ。

こういう条件となると数は限られる。そこで俺が目を付けたのはFN社の傑作中であるFN FAL系統だ。こいつだったら軍用銃だったし、更に民間用のパーツとかも出回ってるのでありだ。銃身を弄れば遠距離も行ける性能だしな。

んで、爺さんの店で置いてあるのはSA-58 OSW、SA-58 SPR、カービンSA-58 Elite、L1A1、更にカナダで使われていたC1もある。俺はこの中から選んだのは、L1A1だ。こいつは民間用だがFALのカスタムパーツも使えるし、基本的にアタツチメントは後付けで20mmピカティニレールを取り付ければカスタム出来るから問題無い。

さて、後はAR-15の代わりに銃だ。基本的にはA<sup>アサルトライフル</sup>Rから一丁買うつもりだが、何を買ったもんか。俺的にはフルオートで撃てる銃を考えているが、基本的にフルオートのA<sup>アサルトライフル</sup>Rは値が張る。それで安価で購入出来るものと言えば、先程も例に出したA<sup>アサルトライフル</sup>Kシリーズだ。

基本的に簡単な整備性と量産性が売りの銃だし、民間用だとしてもそう値が張らない。更に威力だって西側の銃と比べりゃ馬鹿にできねエ。弾薬はAK-47は7、62×39mm短小弾を使用しており、AP<sup>徹甲弾</sup>弾と似た機構を採用しており、破壊力に優れている。

また、AK-74から採用されている弾薬の5, 45×39mm弾は、弾頭の内部に空洞を作り、人体等の目標に命中すると、通常より重量が減っている為弾丸が体内で横転しやすい為回転がより多くなる。それにより傷口が大きく抉られる効果があるので、強力になっている。

その為、俺は5, 56×39mm弾を使用しているAK-74を買うことに決めた。最新式なので、ピカティニレールが搭載されており、アタッチメントが取り付けられるので、とても便利だ。

「つー事で、これとこれを買うわ」

「ああ、分かった。調整はてめエでやる事だな」

「ああ分かってるつーの。後、L1A1用の30発弾倉<sup>マガジン</sup>6つとAK-74用の弾倉<sup>マガジン</sup>は、60発用ドラムマガジン2つと通常の30発弾倉<sup>マガジン</sup>4つ頼むわ」

「俺がそう言うと、爺さんは俺が言った弾倉<sup>マガジン</sup>を取ってきて、勘定を始めた。

「L1A1一丁とAK-74一丁にそれらの弾倉<sup>マガジン</sup>・んで、これらをまとめつと、おら、値段<sup>値</sup>段<sup>段</sup>はこんなもんだ小僧。弾薬はおまけで無料<sup>ただ</sup>でやる」

「サンキュー。分かったこれでいいな?」

「ああ、まあせいぜい死ぬんじゃねエぞ」

「うっせエ。俺は死なねエつーの。そっちこそせいぜい寿命でくたばらねエこつた

な」

俺はそういい、買ったもんを掴み、それらをバックバックに詰める。よし、後は調整済ましてから仕事に取り掛かるとすつかね。こいつらでどんだだけやれるか試さねエとな。

「ほんじゃ行くわ爺さん。また次も頼むわ」

「あア、また必要なもんがあれば来い。俺だつたら大抵のもん用意して待つてやるからよ」

そして、俺はそのまま家へと帰り、買った武器の整備と調整に入るのであった。

## 16話

「さて、準備も済んだしきつさきと行くとするか」

俺はさつき買ってきた装備をある程度馴染むまで調整したので、今日の仕事へと向かう事にした。

一応調整はしたとはいえ、使ってみねえと分からんところもある。装備の試射を射撃訓練場ですてから、廃墟街で物資を回収スカベンジしつつ感染者をぶつ殺すとすつか。

「おや、今から仕事か、アキト殿」

「あア？ リュミエスじゃねエかよ。姫様のお見舞いはもう終わったのか？」

「ああ、とりあえず今日は切り上げてきた。それで、その装備品は一体？ 確か家には無い銃器の筈だが」

「こいつらはさつき買ってきた。んで、武器の試射を射撃場で確かめるついでに物資回収スカベンジに行くつて訳だ」

俺がそう言うのと、リュミエスはしばらく考え込んだ後、口を開く。一体何を言い出すつてんだよ？ 俺がそう考えていると、とんでもねえ事をリュミエスは言い出した。

「アキト殿、もしよろしかったら私もついて行っても良いだろうか」

「はあ!!? お前何言ってるんか分かってんのか!? 素人が着いてくるっつーのは危険が増すし、第一なんでお前が俺について行くなんて考えに至ったのか説明出来るのかよ」

「俺がそう言おうと、少し考え込んでからリユミエスは口を開く。

「姫様が意識を失われてから少しした位だっただろうか、こう考えていたのだ。もし私に力があれば、姫様が倒られる事なんてなかったのでは、と」

「んで、それがなんで俺に付いて行くっつー結論に至ったんだよ」

「アキト殿には迷惑をかけるというのを承知して言うが、私に奴ら感染者について実地で学びたいのと実戦で銃を扱えるようにして欲しいのだ」

「なるほど、こいつの生真面目さっぷりはここ最近で知っているし基本的にこいつは姫様中心で物事を考えている。んで姫様の力になりたいから俺と一緒に仕事をして実戦経験を積みてえ」と。

確かに銃を扱えるようになればある程度楽にはなる。そういう利点で考えりやあこいつを連れて行くのは有るっちゃ有りだ。

しかし、感染者のクソツタレ共はそう簡単にはいかねえ。幾ら銃を扱えるようになってたとしても、死ぬ可能性なんざアホ程ある。まあこいつだったら姫様さえ生きていりやあ良いんだろうが

早く行くんだった！ 俺はお前達を、殺したくはないんだ！

クソツタレ、嫌な事を思い出しちまった。正直に言っちゃえば連れて行きたくねえ。こいつは残されてく奴の気持ちなんざ考えてねえ。

だからOKとは気軽には言えねえ。だが、どうしたもんか。

「アキト殿？」

「ちっ、しょうがねえな全くよ。ああ、こっちの指示に従うってんだったら許可してやるよ」

「本当か!!？」

「ただし、こっちが無理だって判断したら即刻撤収っつー条件を飲め。それが守れねえっつーんだったら許可できん」

「勿論だとも!!」

「そうか、んじやあとつとと服とかの準備をしてこい。言っておくが近接戦闘なんて自殺行為に等しいって事を忘れんなよ。んで、お前が使う武器に関しちやあ俺の予備の武器を預けるが、くれぐれも壊すんじやねえぞ」

俺がそう言うのと、リュミエスは「分かった、すぐに準備に取り掛かる!!」と言って家

へと戻つていく。さて、こっちはこっちで用意しねえとな。

うーむ・L1A1は試し撃ちしてエから渡す訳にはいかん・カラシニコフ  
ニャ  
コフ  
フってなるとAK-74  
 かAR-15になるな。

まあAK-74も試し撃ちしねえとならないから、どうなつてもアイツに渡すのはAR-15になるか。とりあえず、今の俺の持つていく装備のカスタムを済ませるとするか。

今現在俺が持つているL1A1は全くカスタムされていない。最近の銃のようにマウントレール等が取り付けられていないので、まずはマウントレールを取り付けるとするか。

マウントレールを取り付けるのはそう難しい事じゃない。しつかりと銃の知識を身に付けるのとカスタムが自分で出来るように何度も何度も練習すれば慣れる。

「とりあえず、ここの留めネジを外して・ニャ  
コフ  
フる・つと」

ハンドガードを取り付けたら、次はダストカバーにレールを取り付ける。最近のパーツってのはかなり便利で、ダストカバーに直接レールが付いているタイプがある。それを取り付けたら今度はストックを取り替える。

民間用として売られているL1A1は、基本的には木製ストックになっている。しか

し木製ストックには弱点が有る。それは腐るといふ所だ。

実際にあつた話じゃ、ベトナム戦争初期にアメリカ軍に配備されていた銃であるM14は、基本的に湿気が多いベトナムの地では木製ストックというのが災いして、腐り落ちる事案が多発した。

その為、強化アルミ合金製のM16が急遽採用された事がある。まあ、兵士のメンテナンスが不十分のせいで動作不良、排莖不良等の故障が頻発したけど。

しかし現在では強化アルミ合金製だとちよいと重いし、間違えて踏んじまったら歪むことがあるので、現在の主流である強化プラスチック製のタクティカルストックを取り付ける。

それも取り付け終わったら、アクセサリーの取り付けに入る。

サイトは長距離狙撃をするつもりでは無いので、Triconの1×6倍のスコープ。しかし一応市街地での戦闘をする場合があるので、普段は近距離用にオフセットサイトを付けておくのだが、AK74を持っていくので取り付けない。

ちなみにオフセットサイトってのは、簡単に言えばメインで使用しているサイトが故障した時に代用する為のサイトだが、倍率スコープを使用している状況で近距離戦となつた場合、一々倍率を弄るつてのはタイムロスになり、そのまま殺られちゃう場合がある。しかし、その時にオフセットサイトを使って構える事により、即座に近距離戦へと備え

る事が出来る。

「次は・グリップ辺りか」

ここの判断基準は、人によってマチマチだが俺の場合は握りやすいかどうかを重視する。その為、俺的に握りやすいグリップであるショートフォアグリップを取り付ける。

通常より小さいので俺的には扱いやすいグリップの1つだ。

これが終わったら最後に消音器を取り付ける。感染者相手に戦闘するなら必須の装備だ。音に寄ってくるので、まあ無いとかなり面倒な事になるからな。

大体終わったら弾帯に弾倉を入れて行く。既に弾倉にはM62 NATOで制式採用されている軍用の7.62mm×51弾の種類の1つ。タルコフをやってる人はイメージつきやすいかもを詰めてあるので問題は無い。

最後には銃の動作確認だ。コツキングレバーの動作、トリガープルの重さ調整、コツキングレバーを引いてしっかり弾薬が排莢されるかの手動での確認をする。

それが終われば弾倉を装填、コツキングレバーを引き薬室に弾薬を送り込んで安全装置を掛ければ終了だ。

「さて、とりあえずはこんなもんかなア? さて次はつと」

「済まないアキト殿、此方は準備が終わったぞ。次はどうすれば良いのだ?」

「ん・あア、そうか。んじゃあとりあえずお前の装備を・って、そんなモン持つてくのか？」

ざつとリュミエスの服装を確認している時、腰に片手剣を装備しているのを見つけた。そいつは、近距離戦用だから、今回は一応要らねえ筈だが。

「そんなモノ・あぁ、こいつの事か。まあ、何時も常備している。装備だからな。逆に装備していないと、重心が落ち着かなくてな。」

・まあ、そういう事だつーんなら良いか。確かに重心が偏つてると、いざつて時に動きづらしい使わなくてもバランス取る為にや必要になるか。

「なるほどな、そういうのだつたら別に何も言わねエよ。んじゃあお前の装備を渡す」  
「あ、あぁ、分かった」

何故か緊張した面持ちで俺の言葉に頷くリュミエス。一応銃は触った事がある筈だが、なんでちよいと緊張してんだこいつ。まあ良いか、時間も押してるしさつさと用意させるか。

「お前には、俺が使っていたAR―15を渡す。近距離戦を一応考えているからスコ―プは外してある。んで、こいつがそいつの弾薬一式を詰めたチェストリグだ、さつさと装備しな」

「分かった！ えーつと、確かこういう感じに」

リユミエスが装備をつけている間にこっちはこいつ用の光学サイトを用意しないとな。出すとしたら何が良いか・とりあえずEOTEch社製のホロサイト、AIMPOINT COMP2ドットサイト、更にAIMPOINT JH400を用意する。

とりあえずこんなところで良いか。他にもCOBRAサイトやらPKタイプのサイトとかあるが、出しすぎて選べないのも面倒だしな。

「その、とりあえず付けてみたのだがこんな感じだろうか。」

リユミエスがそう言ったからとりあえず視線を向ける。うん、特に問題はない感じか。強いて言う位だと、少しベルトの締めが甘いくらいか。

「まあ、良い感じだな。んじゃあこっちに来てサイトを選べな。適当に並べたから、そんなで自分が狙いやすい方のサイトを決めろ」

「了解だ」

俺がそう言うと、すぐにサイト選びを始めたリユミエス。用意したのは3種類だからそんなには時間は掛からんだろう。そう思いながらリユミエスが選び終わるのを待つ。

2、3分した所でリユミエスは決めたサイトを俺に持ってくる。なるほど、EOTEchのホロサイトか。

「よし、決まった様だな。んじゃあこいつに取り付けろ。付け方は簡単で、自分の見やすい位置に持ってきたらネジで止めるだけだ、簡単だろうか？」

「分かった、えっと、場所はここ位で後はネジをえっと、こんな感じで大丈夫だろうか？」  
「ああ、問題ないな。ネジの締め付けをほど良いぐらいだしこれだったら射撃中に振動でズレたり、落とす事は無いな。だったらさっさと行くぞ、時間は有限だからな」

「了解だ！」

さて、射撃訓練場にさっさと行くか。今は大体午前10時半か。時間かけるとしても、早くても正午には物資回収に行かねえとな。

さっさと調整済まして、物資回収に行かねえと考えるながら、俺はリュミエスを車両へ乗せ射撃訓練場へと向かうのだった。